

タイトル	カナダとの姉妹都市関係の特徴とその影響：板橋区とバーリントン市のケースについて
著者	井上，真蔵
引用	北海学園大学人文論集，37：1-67
発行日	2007-10-00

カナダとの姉妹都市関係の特徴とその影響

— 板橋区とバーリントン市のケースについて —

井 上 真 蔵

はじめに

カナダと姉妹都市提携をしている日本の自治体の数は、現在のところ 73 件である¹。その内の 26 件が北海道の自治体によるものであり、北海道との関係が圧倒的に多い²。ところが東京都及びその周辺も 13 件とかなり多くの自治体が姉妹都市の提携をしている。北海道に関しては、筆者はこれまでに聴き取り調査を行ってきたり地元でもあるので、カナダとの姉妹都市関係に関する情報も身近に存在している³。しかし、北海道以外でカナダと姉妹提携している自治体は 40 余りにのぼる。「一体、北海道以外の地域でカナダとの姉妹都市関係を結んでいる自治体の実態はどのようなものなの

1 カナダ大使館ホームページ：「カナダ・日本 姉妹・友好都市リスト」
http://www.canadanet.or.jp/p_c/sistercity.shtml。カナダ大使館のホームページには 74 件となっているが、次の「脚注 2」に見るように実質的には 73 件である。

2 カナダ大使館の姉妹・友好都市リストでは、北海道とカナダとの提携自治体数は 27 件となっている。しかし、35 番目の上士幌町とスレイブレイクに関しては、上士幌町役場より「交流はあったが姉妹提携関係はない」との回答を得たので、姉妹都市件数としては 26 件である。

3 毎年 12 月には、北海道カナダ協会主催による北海道・カナダ姉妹都市会議が開催されている。昨年は 15 回目の会議が開かれて、13 の自治体が参加し、報告と情報交換が行われた。出席者総数は 23 名。北海道カナダ協会『第 15 回北海道・カナダ姉妹都市会議録』、2006 年。

か」という素朴な疑問が頭に浮かんだのが5年程前になるが、以来北海道外のカナダとの姉妹都市関係の調査を行ってきた。首都圏東京に限って言えば、世田谷区、江東区、板橋区の3自治体が、それぞれウィニペグ(マニトバ州)、サレー(ブリティッシュ・コロンビア州)、バーリントン(オンタリオ州)と姉妹提携を結んでいる。世田谷区と江東区については既に考察を行っているので⁴、本稿では板橋区とバーリントンのケースを取り上げる。

板橋区とバーリントン市との姉妹都市提携は1989年に締結された。日本とカナダとの姉妹都市提携順から言えば、37番目である⁵。日本側の当事者である板橋区は東京都23区の一つであり、東京の北西に位置し、北に荒川という水辺があり埼玉県に接している。現在の人口52万人余りで、住宅街があり、工業地域でもある⁶。一方、カナダ側の都市はバーリントン市である。バーリントン市と言っても、ほとんどの日本人にとっては馴染みのない名前であろう。バーリントン市は、カナダ第一の都市トロント大都市圏の西方55キロの所にありオンタリオ湖に面した人口16万人余りの都市である。この辺りは、トロントからナイアガラにかけてカナダ最大の消費地域でもあり工業地域でもあり、いわゆる「ゴールデン・ホースシュー」と呼ばれている地域である⁷。バーリントンの主な産業は、食品加工・包装、電子産業、自動車、輸送、商業、化学・薬品、環境関連である⁸。

それでは、板橋区とバーリントン市の姉妹都市関係は一体どのようなも

4 拙稿「カナダとの姉妹都市関係の特徴とその影響——江東区とサレー市のケースについて——」、『人文論集』(第26・27合併号)、北海学園大学、2004年；「カナダとの姉妹都市関係の分析——世田谷区とウィニペグ市の姉妹都市関係——」、『人文論集』(第34号)、北海学園大学、2006年。

5 カナダ大使館ホームページ、前掲。

6 「区全体の世帯数及び人口表——平成19年8月1日」板橋区ホームページ。<http://www.city.itabashi.tokyo.jp/KOSEKI/jinko-k190801.html>。

7 バーリントン市役所のホームページ。<http://cms.burlington.ca/PageFactory.aspx?PageID=500>。

8 同上。

のなのだろうか。この日本とカナダの二つの都市は、何を契機としてどのようにして姉妹都市提携に至ったのであろうか。そして、この姉妹都市関係において、どのような交流活動が行われ、どんな特徴があるのだろうか。また、姉妹都市活動を押し進めているのは、どの部署で、どんな特徴があるのだろうか。そして、このような姉妹都市活動を通じて、お互いにどのような影響を受けているのだろうか。本稿は、これらの間に答えようとする試みである。

なお本稿の資料は聴き取り調査に基づいている。この調査には、板橋区役所の国際交流課の担当職員の方々の協力をいただいた。姉妹都市活動の現場に直接関わってこられた方々より、現場経験者の視点からの貴重なお話と御意見をいただくことができ、ここにお礼申し上げたい。ご協力いただいたのは次の方々である。

杉山光治（企画部国際交流課国際交流主査）；有馬綾乃（企画部国際交流課主任主事）；田中美希（企画部国際交流課主事）⁹。

（以上、敬称は略）

I. 提携の経緯

東京の板橋区とカナダのバーリントン市は、どのようにして姉妹都市の締結にいたったのであろうか。見ず知らずの日本の都市とカナダの都市とを結び付けるという縁結びの役割を果たしたのは、東京のカナダ大使館であった。姉妹都市締結にいたる当時の模様を、板橋区の職員の方は次のように語っている。

昭和61年の10月にですね、区民祭りでカナダの大使館のバック

9 所属名ならびに肩書は、聴き取り調査の行われた2002年11月10日当時のものである。なお聴き取り調査が行われた場所は、板橋区役所国際交流課内である。

アップによりカナダフェアを開催したんですね。そのことが板橋区とカナダを結びつけるキッカケとなりまして、日本の都市と姉妹都市を結びたいという風に希望しているバーリントンの情報が紹介されたんですね。それでバーリントンの市長から板橋区長へ、板橋区長のバーリントン市訪問となりまして…¹⁰。

ところで、この話の中には触れられていないが、最初からバーリントンが候補として挙がっていた訳ではない。最初の候補は、カナダ第一の都市トロントであった。上記のカナダフェア開催の前年から、カナダ大使館と板橋区の間で意見交換がなされており、最初はトロント市が候補に挙がり、1986年には当時の区長栗原氏がトロント市を訪問している。その翌年にかけて、さらにトロント市と情報交換をしていたが、そこにバーリントン市の情報が入ってきたのである。こうして、バーリントン市について調査が開始されることとなる¹¹。その結果、姉妹都市の相手として、バーリントンが選ばれることになるが、その時の様子を職員の方は次のように語っている。

規模は、板橋区というのは住宅が多くてですね、やはり都心とはちょっとまた違うんですね。バーリントンも、どちらかと言うとトロントに比べたら、ほんとに住宅街でして緑が多くて、そんな風に暮らしているのが特徴というような都市ですので、そういう面でも規模的にも十分お互いが合っている、ということで、選ばれましたね¹²。

10 2002年11月10日の聴き取り調査(以後、聴き取り調査と略す)より。この当時、カナダ大使館は東京都内や東京の周辺で頻繁にカナダフェアの開催をしていたが、これを縁にカナダの都市と姉妹提携を締結した自治体は牛久市の場合のように他にも見受けられる。

11 政策経営部国際交流課『板橋区 国際化の現況』板橋区政策経営部国際交流課、2003年、12ページ。

12 聴き取り調査より。

実際、カナダ最大の都市であるトロントよりもバーリントンの方が、客観的に見ても妥当であり納得がいくものであろう。板橋区は東京都 23 区の一つであり、首都東京の北西に位置し埼玉県と接している。人口は約 52 万人である。一方、バーリントン市はトロントの大都市圏の西 55 キロの地点にあり、人口は約 16 万人である。双方が都心から離れた住宅街という点、商業地域や工業地域があり規模的にも環境的にも似ていると言う面も考慮された訳であり、「お似合いのカップル」であると言えよう。

それでは、この「お似合いのカップル」たちの姉妹都市締結に対する意欲と態度はどのようなものであったのだろうか。まず、同じ時期に双方が姉妹都市の相手を探していたのである。「丁度まあ、板橋区も提携先を探していましたし、バーリントン側も探しているという、丁度良い機会だったんですね¹³。」と担当職員の方も語っているように、板橋もバーリントンも共に姉妹都市提携を希望していた時期であったのである。

さらに、姉妹都市提携を押し進めるにあたって板橋区長の強い意思とイニシャティブが一つの特徴である。まず板橋区の区長は従来から「国際交流」に力を入れており、姉妹都市締結推進にあたって、当時の栗原区長の強いイニシャティブがあったのである。この件について、職員の方は次のように語っている。

前の栗原区長も、今の石塚区長も国際交流に非常に熱心だということはあるんですね。板橋区は、環境面と国際交流に非常に力を入れておりまして、10 周年の時にこちらから花火を持っていこうというのは、まあ区長さん決断と言え、それはありますね。それでないと、アレはできないですね¹⁴。

ここで触れられている花火とは、姉妹都市提携 10 周年記念に際し、板橋

13 同上。

14 同上。

区がオンタリオ湖で打ち上げた花火のことである。一口に花火と言っても、「25万ドルの花火」である。日本全国には1,555件の姉妹都市提携が存在するが¹⁵、その中で「25万ドルの花火」を打ち上げた自治体は皆無であろう。例えばバブルの時期であったとは言え、ここに板橋区長のバーリントンとの姉妹都市に対する決意とイニシャティブを感じない訳にはいかない。

このような板橋側の区長のイニシャティブに呼応するかのようには、バーリントン側の当事者にも、かなり特色のある強い推進役がいたのである。もちろん行政の長であるバーリントン市長が提携書類にサインをする訳であるが、注目すべきは世界化委員会 (Mundialization Committee) という組織の存在である。何が特色かと言え、この委員会は1984年に「バーリントン市を国際社会の一員となるように尽力し、国際社会の市民レベルでの平和的協力関係を重視する国連の理念を促進すること」を目的に設立され、そして民間の委員から構成されているという点である。一般的に言って、カナダでは姉妹都市に関係する部署は行政の経済開発担当部署か民間の姉妹都市友好協会などが多い。従って、この世界化委員会のように、明確に「国連の理念に賛同し」姉妹都市提携を積極的に押し進める組織が姉妹都市活動に関与する例は、カナダの中でも極めて珍しい¹⁶。

15 「姉妹提携一覧」,自治体国際化協会のホームページ。<http://www.clair.or.jp/cgi-bin/simai/j/00.cgi>.

16 “Mundialization” という言葉は聞き慣れない言葉ではあるが、その言葉の中に、「市民から広げる世界平和促進」という委員会の理念を感じることができる。ところで、板橋区役所ならびに財団法人板橋区文化・国際交流財団の資料では、“Mundialization Committee” に「世界化委員会」という日本語が当てられている。適切な日本語は難しいが、委員会の役割と文脈から考えれば、「市民による世界平和促進委員会」あるいは、「市民から広げる世界平和促進委員会」と言った名称になると思われる。しかし、板橋区の文書では既にこの「世界化委員会」という用語が公式に使用されており、混乱を避ける意味でも、本稿では「世界化委員会」という用語を使用する。Burlington Mundialization Committee “Opening the Door to the World,” City

以上見てきたように、まず一方では国際交流に強い関心とイニシアティブを持った板橋区の首長の存在があり、他方ではカナダでは珍しい国際連合の主張に共鳴したバーリントンの民間団体の存在があったということが挙げられる。そして、これら両者を結びつけたのがカナダ大使館だったのである。以上のような条件により、板橋区とバーリントン市は1989年5月12日に姉妹都市提携に至ったのである。

II. 交流活動の内容

板橋区とバーリントン市との間には、どのような活動がなされているであろうか。まずは概要を把握してから、主な活動について見ていこう。

1. 概要

姉妹提携締結の1989年から2006年7月までの諸活動をまとめたものが、「バーリントン市との交流内容」である¹⁷。この表からも明らかかなよう

of Burlington の日本語訳（板橋区役所国際交流課）を参照。また、15周年記念に板橋区訪問ツアーを市民に呼び掛ける市のホームページには次のようにでていますが、まるで板橋と姉妹都市提携するために世界化委員会が設置されたような表現である。いかに板橋区との交流に力を入れているのかが伝わってくる。“Citizens’ Tour in October Kicks off 15th Anniversary Celebrations with Itabashi —The Mundialization Committee was created in 1984 to promote the City of Burlington as a world community, and the United Nations philosophy of peaceful co-operation among the peoples of the world. International in focus, the committee’s main goal is to promote citizen exchanges in the areas of culture, recreation, business and education. The city twinned with Itabashi, Japan in 1989.” バーリントン市のホームページより。<http://cms.burlington.ca/Page859.aspx>.

17 この表は次の資料より作成された。企画部国際交流課『板橋区国際化の現況』板橋区政策経営部国際交流課，2002年，12-14ページ。政策経営部国際交流課『板橋区 国際化の現況』板橋区政策経営部国際交流課，2003年，

バーリントン市との交流内容

1985		区民まつりでのカナダフェアをきっかけにカナダ大使館と交流、意見交換をし、トロント市について検討
1986		栗原区長がトロント市を訪問
1987		トロント市と情報交換をしていたところ、バーリントン市の情報が入り、同市について調査開始
1988	4	栗原区長がバーリントン市を訪問
	7	区議会代表による姉妹都市提携事前調査団がバーリントン市を訪問
	10	ローリー・バード市長を含む調査団が板橋区を訪問
1989	5	バーリントン市と姉妹都市提携(バーリントン市役所内) 調印団：区長、区議会議長ほか
	9	区民訪問団がバーリントン市を訪問し市民と交流
1990	1	バード市長とバーリントン・ティーン・ツアー・バンド(総計257名)が板橋区を訪問
	3	バーリントン・エアーカーデッツ(ボーイスカウトと同種の団体)が板橋区を訪問。ボーイスカウトと交流
	6	提携1周年記念。板橋区による花火大会をオンタリオ湖畔で実施
		区民訪問団(80名)がサウンド・オブ・ミュージック・フェスティバルに参加
	10	バード市長、世界化委員会委員長、ミス・ティーン・バーリントンが板橋区を訪問
1991	3	青少年派遣団がバーリントン市を訪問(20名：引率5名)
	6	区立図書館とバーリントン市図書館との間で「姉妹図書館宣言」
	6	区民訪問団一行2団体(板橋郵便局及び板橋青色申告会主催ツアー)がバーリントン市を訪問
	7	シェリダンカレッジ夏期英語セミナーで区民がバーリントン市を訪問(20名)
	10	バード市長、世界化委員会委員長及び高校生(4名)が板橋区を訪問
1992	6	和太鼓のグループがバーリントン市を訪問し、サウンド・オブ・ミュージック・フェスティバルに参加
	7	バーリントン市青少年交流団が板橋区を訪問(28名)
	7	シェリダンカレッジ夏期英語セミナーで区民がバーリントン市を訪問(20名)
	10	ウォルター・マルケヴィッチ市長、経済交流団及び高校生が板橋区訪問(計13名)
1993	3	バーリントン・エアーカーデッツが板橋区を訪問
	6	茶華道連盟がバーリントン・マルチ・カルチャー・フェアに参加
	7	青少年派遣団がバーリントン市を訪問(30名：引率7名)
		シェリダンカレッジ夏期英語セミナーで区民がバーリントン市を訪問(15名)
	11	バード前市長一行(6名)が板橋区を訪問
1994	6	提携5周年記念：板橋区による花火大会をオンタリオ湖畔で実施
		区代表団、区民訪問団(80名)がサウンド・オブ・ミュージック・フェスティバルに参加
	7	バーリントン市青少年交流団が板橋区を訪問(20名)
		シェリダンカレッジ夏期英語セミナーで区民がバーリントン市を訪問(14名)
1995	6	区民ツアー(40名)
	7	青少年派遣団がバーリントン市を訪問(30名：引率5名)
		シェリダンカレッジ夏期英語セミナーで区民がバーリントン市を訪問(15名)
	10	バーリントン市代表団(議員：市長代理、他2名)及び市民劇団(59名)が板橋区を訪問し、区民まつりにミュージカル「赤毛のアン」を上演(劇団員48名がホームステイ)
1996	3	バーリントン市より「石」のプレゼント(バーリントン広場に設置)
	6	区民ツアー(40名)
	7	バーリントン市青少年交流団が板橋区を訪問(20名)
		バーリントン市へ英語研修(16名)
	11	バード前市長一行(4名)が板橋区を訪問
1997	6	バーリントン市の「いたばし通り」の命名に際し、板橋区よりバーリントン市へ「板橋」を寄贈。区民ツアー(40名)
	7	青少年派遣団がバーリントン市を訪問(30名：引率4名)
		バーリントン市へ英語研修(16名)
1998	2	区立美術館で「カナダの現代セラミックアート展」(バーリントンアートセンターの取蔵品を展示)学芸員他3名が板橋区を訪問
	6	区民ツアー(41名)がバーリントン市を訪問
	7	板橋区の子供がバーリントンでの国際スポーツ大会に参加(子供8名、保護者2名、引率1名)
		バーリントン市青少年交流団が板橋区を訪問(約20名)
		バーリントン市へ英語研修(16名)
1999	6	提携10周年記念。板橋区による花火大会をオンタリオ湖畔で開催
		区代表、文化団体、区民ツアー(総勢107名)がバーリントン市訪問。文化団体(和太鼓、三曲、和風)がサウンド・オブ・ミュージック・フェスティバルに出演
		青少年派遣団がバーリントン市を訪問(25名：引率4名)
		バーリントン市へ英語研修(16名)
	10	提携10周年記念：バーリントン市民代表団(市長他10名)及び市民タップダンスグループ「ザ・フットノーツ」が板橋区を訪問し、区民まつりに参加(計26名)
2000	6	区民ツアー(32名)
	7	バーリントン国際スポーツ大会へ板橋区少年サッカー連盟と少女バレーボールチームが参加(子供23名、監督・コーチ9名、引率2名)
2001	9	板橋区文化団体訪問ツアーがバーリントン市を訪問(神田流神明囃子保存会16名、板橋区演奏家協会11名)

カナダとの姉妹都市関係の特徴とその影響（井上）

2002	6	区民ツアー（34名）
	8	バーリントン国際スポーツ大会へ板橋区少年サッカー代表チームが参加（子供14名、監督・コーチ4名）
2003	9	区民ツアー（28名）
2004	6	姉妹都市提携15周年記念。区民代表、文化団体、区民ツアーがバーリントン市を訪問。バーリントン市役所で「板橋区紹介写真展」の開催、サウンド・オブ・ミュージック・フェスティバルへの「いたばしまつり屋台」の出店、文化団体の神楽公演
	10	バーリントン市代表団、文化団体、市民ツアーが来区 美術展「コネクションズ」の開催、区民まつりへの参加
2005	6	区民ツアー（19名）
2006	7	バーリントン国際スポーツ大会へ少女バレーボールチームが参加

に、提携から17年の間に、様々な相互交流が活発に行われている。

板橋区民による区民ツアーが14回、英語研修派遣が9回、青少年相互派遣が5回実施され、ほぼ毎年何らかの活動が行われていると言ってもよい。但し、区民ツアーと英語研修派遣に関しては、バーリントン側からそれに相当するものは派遣されておらず、板橋区からの一方的な派遣になっている。バーリントン市民が板橋を訪問したのは、下に述べる文化交流団体が訪れた時の4度のみである。青少年相互派遣については、1991年より隔年ごとに相互に派遣されており、板橋から5回、バーリントンから4回の往来があり、バランスのとれた交流となっている。しかし、これらの活動のうち、英語研修派遣と青少年相互派遣は、それぞれ1999年の9回目と5回目が最後となり以来実施されてはいない。

行政の首長や議員の相互訪問も、板橋から4回バーリントンから5回の計9回行われている。バーリントンの元市長の2回の訪問を加えると11回となり、バーリントン側の積極的な姿勢が伺える。姉妹提携締結の節目となる、1周年、5周年、10周年を記念して、板橋区からのプレゼントとして、オンタリオ湖畔で花火大会を開催している。

これらに加えて、文化団体も相互訪問を行っている。板橋からは和太鼓・茶華道などの文化団体の派遣が5回あり、バーリントンからは市民劇団や

12-14 ページ。策経部国際交流課『板橋区国際化の現況』板橋区政策経部国際交流課、2006年、15-18 ページ。「バーリントン市との交流経緯」板橋区文化・国際交流財団交流課のホームページ、<http://www.city.itabashi.tokyo.jp/icief/twin/burlington/exchan.htm>.

タップダンスのグループが3回訪れている。

さらに、1998年からは、少年少女がバーリントン国際スポーツ大会に参加するようになり、これまでに4度バーリントンを訪れている。

このように、様々なレベルで、しかも広範囲にわたり活発な相互交流が行われている。

2. 提携記念の行事と活動

一般的に姉妹都市関係においては、記念となる節目の年に様々な催し物が行われることが多いが、これらは遠く離れた姉妹都市との関係を再確認し、さらに発展させる活動となる。板橋区の場合には、姉妹都市提携締結の記念として、1990年に1周年、1994年に5周年、1999年に10周年、2004年の15周年に、それぞれ80名、80名、107名、80名の訪問団がバーリントンを訪れている。バーリントン市からは、1周年に257名、5周年には訪問団はなかったものの、10周年には37名、15周年には55名の訪問団が訪れている。

このように数多くの市民が相互の都市を訪れているが、その特徴は双方共に文化団体の活発な活動が見られることである。例えば、板橋区からは、「板橋区三曲連盟」、「四ツ又磯六太鼓」、「板橋区凧の愛好会」が参加している。「板橋区三曲連盟」と「四ツ又磯六太鼓」は、サウンド・オブ・ミュージック・フェスティバルにて、「六段」などを「琴、三味線、尺八のみごとなアンサンブルで演奏し」、10代の若者からなる「四ツ又磯六太鼓」はパレードでも「威勢良く一糸乱れず」演奏して大いに観客を魅了させたようである。また、「板橋区凧の愛好会」は、フェスティバル会場で「凧づくり指導と凧上げの実演」¹⁸を行い、大好評であったようであり、その盛況振りは次のように伝えられている。

18 写真は、「板橋区・バーリントン市姉妹都市提携10周年記念バーリントン市訪問」板橋区文化・国際交流財団交流課のホームページより。<http://www.city.itabashi.tokyo.jp/icief/twin/burlington/y10aniv.html>



凧作り（財団のホームページより）

受付には大人も子ども混じえた長蛇の列ができ、凧を獲得できなかった子どもが泣き出したり凧を奪い合ったりする光景も見られるほどの大反響でした。晴れ渡った大空には、バーリントン市民が揚げた無数の和凧が、天高く翻っていました¹⁹。

一方、バーリントンからは、10周年にはタップダンスグループの「ザ・フットノーツ」、15周年にはシニアのダンスグループ「クロッカーズ」に、フルート奏者やバイオリニストを加えたメンバーが訪れている。板橋の「三曲」や「和太鼓」が日本的ならば、「ザ・フットノーツ」にしる「クロッカーズ」にしる非常にカナダ的だと言えるだろう。まず、市民タップグループと言うのも日本では珍しいが、この「ザ・フットノーツ」は、55歳以上の女性10名男性1名のグループである。それが短いスカートを履き若々しい動作で、「区民まつりに参加したり、小中学校や区内施設、高齢者のための

19 同上。

シンポジウムで演技を披露」するのである。また、「クロッガーズ」²⁰は、26歳～72歳までの構成で若い人も含まれてはいるが、シニアのダンスグループであり、「年齢を重ねても、若く楽しく活動することを目的に活動」している。フルート奏者やバイオリニストが加わり総勢14名である。このグループが板橋区内の各所で「華やかなダンスとクラシック音楽」や「カナダのフォークソングなどで構成されたステージを披露」したのである。さらに、板橋区民謡連盟と交流したり、「区民まつりのパレードに飛び入り参加する」など、大いに記念行事を盛り上げたそうである²¹。

記念行事の一環として形のある象徴的な物が相互に贈られることが多い



「クロッガーズ」(財団のホームページより)

20 写真は、「姉妹都市提携15周年記念バーリントン市民来訪」板橋区文化・国際交流財団交流課のホームページより。http://www.city.itabashi.tokyo.jp/icief/twin/burlington/houkoku/2004/autumn_tour/2004_autumn.html.

21 「姉妹都市提携15周年記念バーリントン市民来訪」, 板橋区文化・国際交流財団交流課のホームページ。http://www.city.itabashi.tokyo.jp/icief/twin/burlington/houkoku/2004/autumn_tour/2004_autumn.html.



10周年記念の花火（財団のホームページより）

が、板橋区の場合は非常に特徴的である。それは、1周年、5周年、10周年の節目の年ごとに、夏のオンタリオ湖の夜空に打ち上げられる花火²²をプレゼントしているのである。花火と言っても「25万ドル」もの価格のものである。当時のカナダドルからすれば、3,000万円に近い。海外と姉妹都市関係にある日本の自治体数は約1,600件であるが、恐らくその中でも数千万円の花火を打ち上げたのは、板橋区だけであろう。この件はオンタリオ州議会でも取り上げられ、ジャクソン議員が次のように感謝の意を表明している。

議会のみなさま方に、1990年度のサウンド・オブ・ミュージック・

22 写真は、「板橋区・バーリントン市姉妹都市提携10周年記念 バーリントン市訪問」, 財団のホームページより。 <http://www.city.itabashi.tokyo.jp/icief/twin/burlington/y10aniv.html>.

フェスティバルの開催についてお知らせできますことを嬉しく思います。フェスティバルは明日、6月20日に始まり24日の土曜日まで開催されます。

本年度の祭りのハイライトは、板橋から贈られた友情の花火であります。土曜の夜10時半に打ち上げられます。…

二つの都市は遠く離れていますが、われわれの相互理解は非常に深まっております。この相互理解の印として、板橋区のみなさん方は世界的にも有名な25万ドルという高価な花火をバーリントン市に贈ってくださいました。私はこの機会に板橋区の区長さんと区のみなさん方の温かいお気持ちにたいしてお礼を申しあげたいと思います。…²³

とりわけ10周年記念のあたりは、最も盛り上がった時期であり、その時の状況は次のように記されている。

10周年を祝した板橋区主催の花火大会は、6月19日(土)、ようやくバーリントンに宵闇が訪れはじめた午後10時30分、オンタリオ湖畔で開催されました。板橋区長が、“Let’s enjoy Japanese Fireworks!”と合図をすると、湖畔を埋め尽くした約20万人もの観衆から歓声と拍手が沸き起こりました。花火が一発打ち上がるたびに手を叩いて喜ぶ人、口笛を鳴らす人、そんなバーリントンの人々のはしゃぎぶりは、「いたばし花火大会」を毎年見物できる私たちにとっては新鮮に映りました。翌日は、多くの市民の方々から Thanks Letter をいただき、帰国後も6人の市民から E-mail が届きました。誰もが日本の花火の繊細さ、豪華さ、芸術性の高さを称えていました。そして、この贈り物への感謝の言葉が書いてありました²⁴。

23 オンタリオ州議会議事録より。http://www.ontla.on.ca/hansard/house_debates/34_parl/session2/L049_90.htm#P12_1672.

24 「板橋区・バーリントン市姉妹都市提携10周年記念——バーリントン市訪

このように記念の節目ごとに上げてきた花火も、三度目の10周年が最後となった。「15周年の時は恐らく財政的には非常に厳しいですし、それは、もうそこまでは出来ないだろうと言うふうに思ってるんですけど…。でもねー、オンタリオ湖、20万集まりますからね。ほんとに、イタバシ・ファイヤーワークスですよ!!」と職員の方が残念そうに述べていたが²⁵、15周年記念には行われることはなかった。花火に数千万円を使うことに対しては、賛否両論があろう。しかし、オンタリオ湖の夏の夜空に色とりどりの花を咲かせてカナダ人の目を楽しませ、日本の文化を脳裏に刻み込んだのは確かであろう。音と色彩が Itabashi Fireworks という言葉とともに、思い出されるに違いない。同時に板橋区の区長の姉妹都市にたいする姿勢とリーダーシップを現すものでもあろう。とは言え、いくらリーダーシップがあるとしても、もはや数千万円の花火の打ち上げが許されるバブル時代ではないのである。

この10周年の花火にたいするお礼として、1999年にバーリントン市からは「友好の時計 (Friendship Clock)」²⁶ と呼ばれる街路時計が贈られて、板橋区役所の正面玄関の所に設置されている。その前年はバーリントン市の自治制度125年を記念してバーリントンの市役所前に設置されたものと同じものである。除幕式には、マックアイザック市長が挨拶を行った。時計は青い5メートル余りの大きさと、四面に時計がついている。南北の面には板橋区の紋章がつけられ、東西の面にはバーリントン市の紋章がつけられている。そして上部には BURLINGTON-ITABASHI, 姉妹提携をした年から10周年の年が「1989-1999」と刻まれている。お互いの姉妹都市において、「友情の時を刻む」という実に象徴的な贈り物であると言える²⁷。

問及び記念行事写真集」, 板橋区文化・国際交流財団交流課のホームページより。<http://www.city.itabashi.tokyo.jp/icief/twin/burlington/y10aniv.html>.

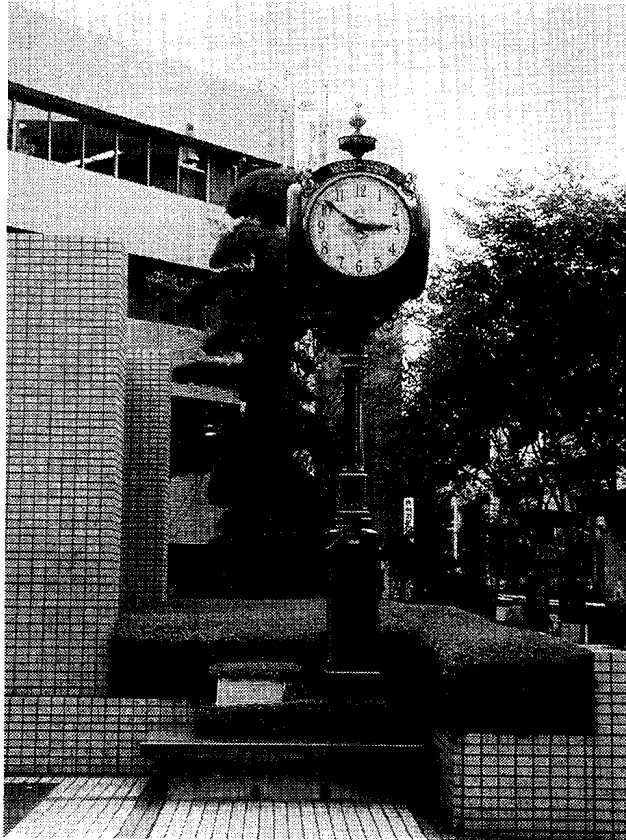
25 聴き取り調査より。

26 板橋区役所前に設置された「友好時計」, 筆者撮影。

27 バーリントン市役所のホームページの“10th Anniversary Celebrations”

また、特に節目の年ではないが、バーリントン市が通りの一つに Itabashi Way (板橋通り) と名付けた返礼として、1997年に板橋区より Itabashi Bridge (文字通り「板橋」) が寄贈されている²⁸。

このように市民が相互に訪れるということ、そして何よりも「文化団体」



板橋区役所前のバーリントン友好時計

の項目に、次のように書かれている。“One of the highlights of the visit was the unveiling of our gift to Itabashi, the Friendship clock. This clock is a replica of the 125th anniversary clock that stands outside Burlington City Hall.” <http://cms.burlington.ca/PageFactory.aspx?PageID=101>. 「板橋区・バーリントン市姉妹都市提携10周年記念——バーリントン市訪問及び記念行事写真集」前掲、も参照のこと。<http://www.city.itabashi.tokyo.jp/icief/twin/burlington/y10aniv.html>.

28 写真は、バーリントン市役所のホームページより。<http://cms.burlington.ca/PageFactory.aspx?PageID=101>.

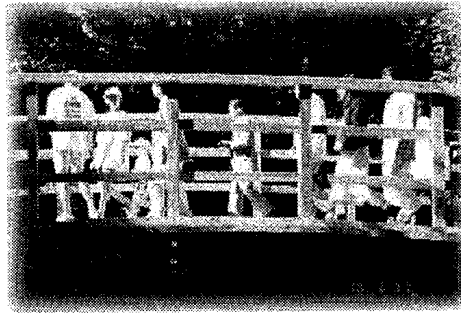
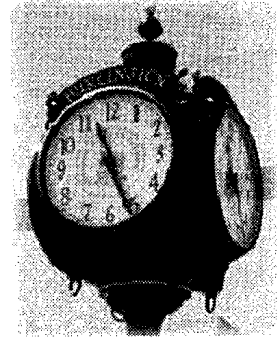
- [Living in Burlington](#) ▶
- [Parks and Recreation](#) ▶
- [Burlington Transit](#) ▶
- [Visiting Burlington](#) ▶
- [Business in Burlington](#) ▶
- [Welcome to City Hall](#) ▶
- [Council](#) ▶
- [Online Documents](#) ▶
- [Online Services](#) ▶
- [Mapping](#) ▶
- [Quick Links](#) ▶
- Font size: [-] [+]

> [Home](#) > [Welcome to City Hall](#) > [Boards and Committees](#) > [Burlington Municipalization Committee](#) > [Itabashi, Japan](#)

Itabashi, Japan

In May of 1989 the City of Burlington signed a twinning agreement with the City of Itabashi, Japan. In the following years, various exchanges and programs have been carried out between Itabashi and Burlington and relations between the cities have flourished on all levels. Itabashi is located in the northwestern part of the metropolis on the Shyakuji, Shingashi and Arakawa Rivers 45 km northwest of Tokyo. They have a population of over 500,000.

The name Itabashi literally means wooden bridge and was derived from a wooden bridge constructed some 800 years ago over the Shakuji river.



Itabashi Bridge

In return for the City of Burlington naming a road in Burlington "Itabashi Way", the City of Itabashi donated Itabashi Bridge to Burlington in June of 1997. The bridge is 20 meters in length and 4 meters in width and situated over a stream near Tansley Woods Community Centre.

バーリントン市役所のホームページ

が訪れて「言葉を越えた表現方法」で時間と空間を共にする意義は大きい。さらに、Itabashi Fireworks はバーリントンの人々の間で語り継がれることであろうが、相互に贈った街路時計や「板橋」の存在も見落とすことはできない。板橋区役所を訪れる区民の方々は、区役所の正面玄関に設置された堂々とした「西洋時計」を見る度にバーリントンのことを思い出すことであろう。そして、バーリントンの人々も Itabashi Bridge を渡る度に、遠く離れた姉妹都市板橋のことを思い出すことであろう。

3. 板橋区民ツアー

板橋区民のバーリントン訪問ツアーは、特色の一つと言える。上記のように、これまでに 14 回派遣されているが、これはほぼ毎年派遣ということ

である。職員の方が「これほど毎年区民ツアーが続いているのは、23区内でもウチとあともう一つぐらいしか無いようなんですよ。」と多少自慢げに話してくれたが、実際これは非常に珍しいことである。ツアーの規模は、少ない時で32名、普通は40名から80名程度となることが多いようである。ともかく非常に好評のようで、担当の職員の方は次のように語っている。

板橋区民の方では、区民ツアーがほぼ年に1回あるもんですから、やはり奮闘はしていきまして、幅広いメンバーの方が応募してきまして、もちろん倍率はいつも高いもんですからね。やはり多い時は5倍とかで、抽選なんですね。それで落ちる方から、ここに「どうして落ちたんだ」という話もきますよね。それでも、落ちた方は次の機会に応募してくれますし…²⁹

この区民ツアーは「100%自費で行ってもらってます。」と言うように、行政から補助はでていない。旅費から宿泊費から、全部、参加者持ちである。行政が負担するのは、主として現地での「市民交流」にかかる費用だけである。行政が負担する費用に関して、担当の方は次のように話してくれた。

区民ツアーは、ほとんど行政はお金を出してないんですよ。何かあるとすれば、コーディネート代ですかね。オリジナルのプログラムを作るコーディネート代が、お客さんから貰う料金に反映されてないだけです。後、向こうで市民交流をしますよね。市民交流の交流費をウチが持つんですよ。こちらから行った時の交流会をやって、参加者の方の経費の中にはその分は入ってなくって、こちらが負担するという形ですね。後は、保険料とかですね³⁰。

29 聴き取り調査より。

30 同上。

このように自己負担であり、時期は6月、期間は8泊9日程度である。当然のことながら、それなりに経済的余裕と時間的余裕がある人たちが応募するようである。つまり、「平均年齢が60余歳」という訳で、定年退職後の人たちがかなり多いようである。とは言え、リタイアした人たちばかりと言う訳でもなく、かなり広い層から参加しているようである。参加者について、担当の方は次のように語ってくれた。

うちの方は割と、リタイアの方は勿論多いのは多いのですが、学生さんも居ますし、ご夫婦で、例えば40代ぐらいの方というのも居ますし、幅が広いですね。バーリントンは、そういうような形になっています³¹。

このようにして、かなりの人数の市民が参加する区民ツアーが10年以上も継続してきたということには、それなりの理由がある。まず、後にも触れるが、バーリントンに滞在するということが忘れることができないような魅力的な体験となるということである。また、当然のことながら、時間的・経済的に余裕のある人々が存在しているということと、プログラムの企画・実施にあたる担当職員の方々の熱意と確かな仕事振りであるとも言えよう。しかしながら、相互交流という点から見ると、職員の方が「ただ、やっぱり向こうから来ないし、うちばかり毎年行ってるし」と述べているように、一方通行の傾向にあるのが問題点であるとも言えよう。

31 板橋区は、バーリントン以外にもモンゴル、北京市石景山区、マレーシア・ペナン州、ボローニャ市の4つの都市と姉妹都市を結んでいる。区民ツアーも提携都市に応じてそれぞれ特色があるようで、バーリントン訪問ツアーと比較して、担当の方は次のように語っている。「またモンゴルとか中国もやっているんですが、モンゴルは若い子が多いといたり。自然に口コミで広がっているらしくって、色んな方が参加されてますね。」

4. バーリントン英語研修

表の中に「英語研修」という言葉がしばしば現れているが、英語研修は1991年から1999年の間に9回実施されている。当初は、「シェリダンカレッジ夏期英語セミナー」と呼ばれ、定員も20名であった。1996年から「バーリントン市英語研修」と改められ、定員も16名となっている。期間は2週間である³²。

参加資格は、区内の在住・在学・在勤の者であり、18歳以上であれば年齢は問わない。16名の選抜にあつたては、筆記試験とTOEIC形式の試験があり、英検2級レベルの英語力を基準としている。英検2級のレベルに絞った後に、面接が行われ、16名が選抜されるのである。参加資格に関して、「年齢は問わない」というユニークなプログラムで高齢者もいるようであるが、実際は大学生が多くなるとのことであつた³³。

バーリントンでの研修内容は、月曜日から金曜日の午前中が授業で、午後は課外活動にあてられ、施設見学やキャンプをしたり、ホストファミリーと出かけることもある³⁴。

ところで、上記に触れたように、途中から研修の名称が変更されているが、それはプログラムの形式と内容が変わつたせいである。当初は、シェリダンカレッジの「寮に入って、シェリダンカレッジの夏季英語セミナーに参加していた」のである。ところが、大学の夏期英語セミナーから、会場は「市役所の一室」に移り、講師もシェリダンカレッジの先生に個人的に依頼して謝礼を払うという形になつたのである。この大きな変化は、財団（財団法人板橋区文化・国際交流財団）が英語研修の補助を負担していたのだが、財政的に不可能となつたためである³⁵。担当者は次のように語ってくれた。

32 聴き取り調査より。

33 同上。

34 同上。

35 同上。

まあ時代の流れって言いますか、こちらの財団の負担も大きくなってきたので、会場を市役所の一室を借りて、学生さんのステイ先もホームステイということにしたんですね。ホームステイは基本的に無償です³⁶。

そして、このようにして工夫をしながら続けられた英語研修は、1999年の9回目が最後となった。やはり財源の問題である³⁷。担当の方は、次のように述べている。

受益者負担ということがありますよね。そういう観点から、時代の流れで、シェルダンカレッジは中止になったんですよ。…やはりESLのように、かなり行政側の補助が必要になってくるんですよ。教育とかの目的になりますから、全部自費で行ってくださいと言っても、またちょっと。こっちも行っていただく方には、それなりの試験を受けて、それなりの方に行っていただいて、今後の交流に繋がりたいと思うもんですから、助成しますよね。そういう関係で、段々財政難の折、継続が難しくなってきたというのもあるんですよ。99年で最後ですね。もう今はやっていないです³⁸。

中止した理由は、財政難の折ということもあるんですが、もう一つはね、民間で同類の事業がありますよね。同様の事業が。それは、民間が出来ることは、民間に任せようというところもあるんですよ。今、色んな留学のプログラムがあるじゃないですか。(別の職員)³⁹

36 同上。

37 一人当たり20万円ほどの補助をしていたとのことである。

38 聴き取り調査より。

39 同上。

財政的な理由は、端的に「時代の流れ」という言葉で現わされている。「民間が出来ることは、民間に任せようというところもあるんですよ。」と述べられているが、この考え方をここでの英語研修プログラムに当てはめるのは妥当ではない。民間のプログラムとは、重要な点で異なっているのである。それは、「姉妹都市という枠組み」の中で行われるプログラムであるということである。これは利益をあげることを目的とした民間の英語研修とは、根本的に異なる点であり、「英語プログラム」ということで同一視することは妥当ではない。さらに、この場合は既に上で触れたように、参加資格は「区内の在住・在学・在勤の者であり18歳以上であれば年齢は問わない」という非常に柔軟なプログラムである。だからこそ、職業も年齢も越えて共通の体験を産み出すことができるプログラムだったのである。しかし、上記のように、もはや行政負担の英語研修プログラムの継続は困難な情勢である。「その点、区民ツアーは、プログラムすれば、後は余裕のある方が応募してきますから、継続するんですよ。」と職員の方が語っているように、非常に対照的である。残念ではあるが、力点の置き方がシフトせざるを得なくなってきたのが現在の状況である。しかし、年齢も職業も様々な人たちが参加し、バーリントンという異文化の中で行われるプログラムの教育的効果・地域に活力を与える効果は計り知れないということは忘れてはならないことである。

5. 青少年相互派遣

青少年相互派遣団は、表に示されたように1991年より隔年ごとに相互に派遣がなされており、板橋からは5回派遣されバーリントンからは4回の派遣団の往来があった。板橋とバーリントンの間における、唯一の「相互に行き交う交流」であった。しかし、このプログラムも、バーリントン英語研修と同様に1999年に25名の青少年が派遣されたのが最後の回となっている。

この青少年派遣プログラムに関しては、当初は財団も関係していたようだが、これまで述べてきたプログラムとは異なり、担当部署は教育委員会

の生涯学習課であった。「板橋区と姉妹都市バーリントン市との市民レベルの交流を深める。また、ホームステイを通じ、異文化を体験し、国際感覚豊かな青少年の育成を図る。」というのが事業目的であった⁴⁰。期間は7月末の11日間で、8泊9日のホームステイが組み込まれている。派遣人数は30名で、高校生と中学生は半々のようである。事前研修が4、5回行われ、担当職員を含めて4、5名の教育関係者が付き添う。派遣員の決定は、まず広報紙などで公募を行い、板橋区内の中学生・高校生からから選抜されるが、最終的には抽選で決められていたとのことである。これは非常に人気の高いプログラムであり、30名の定員に対して300人もの応募者があるような状況であった。従って、廃止されてからも、区民の間では復活してほしいとの要望が強いとのことである⁴¹。

上記の英語研修プログラムの廃止は財政的な理由からであったが、残念ながらこの青少年派遣についても同様である。派遣人数が英語研修の倍の30名で4名の引率者というプログラムでは、その事業費用は700万円を越える額となろう。さらに、これ以外にも、継続不可能な方向に向かわせる状況があったようである。この点に関して、職員の方は次のように語っている。

青少年プログラムが中止になったという話もですね、ウチが送る一方で、向こうから来なくなりました。やっぱり（バーリントンからは）来れないんですよ。それで続かなくなっちゃったんです。それも一つの原因ですね⁴²。

40 板橋区教育委員会事務局社会教育課『平成7年度バーリントン市青少年国際交流事業——青少年バーリントン市派遣報告』板橋区教育委員会、1996年、「はじめに」。

41 聴き取り調査より。

42 同上。

バーリントンからの訪問団は隔年毎に板橋を訪れており、バランスの取れた相互交流になっていたが、バーリントンの参加者にしてみれば基本的には自己負担なので隔年毎に20名の訪問団を募るとするのは非常に難しいということである。

その他の理由として、バーリントン市側の受け入れ体制、つまりホームステイの確保が容易ではないという点もあるようで、職員の方は次のように語っている。

バーリントン側の負担も大きかったんですね。負担って言うのは、30人の子供達をホームステイさせるということです。30名のホームステイって言うのは大変ですよ。例えば30人日本から来ると言った時に、大変苦労しているということが、私どもにも分かるんですね。結局、一つ一つのホストファミリーに3人も4人も子供が行ったりすることになるんですよ。…向こうはお部屋が広いですからね。だから、8人から10人ぐらいのホストファミリーに30人の子供達が割り振られるというのが現状なんですね⁴³。

基本的な問題は財源であるが、こんな風に継続中止という方向が打ち出されると、マイナスの関連要因が列挙されるのは自然なことであろう。しかし、青少年派遣の報告書の中には、板橋区の30名の中学生や高校生が日本国内では決して手に入れることのできない貴重な体験をしてきているのが明確に書きとどめられている⁴⁴。残念ながら、姉妹都市という枠組みの中

43 同上。

44 板橋区教育委員会事務局社会教育課『平成7年度バーリントン市青少年国際交流事業——青少年バーリントン市派遣報告』板橋区教育委員会、1996年。板橋区教育委員会事務局生涯学習課『平成9年度バーリントン市青少年国際交流事業——青少年バーリントン市派遣報告』板橋区教育委員会、1997年。板橋区教育委員会事務局生涯学習課『平成11年度バーリントン市青少

でのホームステイという体験がもっている「教育的効果」が十分に認識されていないように思われる。費用の面で言えば、派遣規模を縮小するとか、回数を3年に一度にするとか、あるいは全額自己負担にするとか、何とか存続の方法は考えられるのではないだろうか。

III. 交流担当部署

姉妹都市活動は、一般的に「国際交流課」といった組織が担当することが多い。板橋区の場合にも区役所の組織として「国際交流課」は存在している。しかし、それと同時に財団法人文化・国際交流財団が存在しており、この両者の関係が他の自治体には見られない特色を持っている。以下、この担当部署の特徴と、それがどのような活動を行っているのかを見ていこう。

1. 財団法人文化・国際交流財団の存在と役割

(1) 設立の経緯

「財団法人板橋区交流協会」は、1989年4月に設立されているが⁴⁵、これが後に財団法人板橋区文化・国際交流財団となる。1989年という時期は、上記に述べたように板橋区がカナダ大使館と関わりあいを持ち、カナダとの姉妹都市を探しはじめた時期と一致している。この財団の設立は、国際交流分野に関心が高い板橋区長の姿勢を現している。この点について、職員の方は次のように述べている。

（区長）は国際の部分是非常に熱心で、「外国の方はキチッと対応しているか」とよく言うんですよ。そう言う意味で、国際交流課というの

年国際交流事業——『青少年バーリントン市派遣報告』板橋区教育委員会、1999年。

45 企画部国際交流課『板橋区 国際化の現況』板橋区政策経営部国際交流課、2002年、9ページ。

も置いて、財団の方でも行ってるんですね⁴⁶。

ところが、こうして設立された「財団法人板橋区交流協会」は、2001年4月1日付にて、「文化振興財団」と一つになって、「財団法人 板橋区文化・国際交流財団」と改称されたのである。その変更の理由は、財団の「目的」の箇所の文言からもうかがい知ることができる。

目的：「板橋区における地域文化の創造支援と国際交流の活性化を図るため、外国人を含めた住民の文化振興及び外国都市との交流を推進し、もって文化の香りの高いまちづくりと世界平和の促進に寄与する⁴⁷。」

つまり、従来のように、単に海外との「姉妹都市関係」や「国際交流」というだけではなく、「外国人を含めた住民の文化振興」という言葉が現しているように「地域住民としての外国人」への対応を考慮したものである。まさに時代の要請を現しているものでもある⁴⁸。このように従来国際交流に加えて、地域内の外国人住民への対応・支援も含むため、活動範囲は広範にわたっている。

ところで、この財団の特徴の一つは、基本財産額が6億円で全額板橋区の出資であるという点である。この額から、板橋区の国際交流・姉妹都市

46 聴き取り調査より。

47 財団法人板橋区文化・国際交流財団交流課『平成14年度事業概要』財団法人板橋区文化・国際交流財団、2002年、3ページ。

48 板橋区自体は526,134人の人口のうち外国人登録が15,362人。3ヶ月以上の滞在者で、留学生、就労目的と様々である。その内、中国人が7,613人。二番目が韓国・朝鮮で、3,632人。フィリピンが1,439人。これらを区と財団法人が平行しながら担当している。政策経営部国際交流課『板橋区 国際化の現況』板橋区政策経営部国際交流課、2006年、1ページ。

交流にたいするコミットメントの姿勢が伝わってくる⁴⁹。しかも、この6億という基本財産額は、当初はさらに大きかったようで、担当職員の方は次のように述べている。

当初はですね、国際交流協会があった時は5億。それから文化の振興財団があったときも5億。あわせて10億あったのを、今度少し減らせて6億にしたんですね⁵⁰。

当初の予定では、6億円の基本財産が産み出す利子を頼りにしていたようであるが、「現在はその（基本財源の）果実で運営するというのは、ほとんど無理でして」と語っている⁵¹。いずれにせよ、これだけの額の基本財源を有する国際交流財団は他には例を見ないものであり、板橋区長の国際交流に対する態度とイニシアティブを現すものであると言えるだろう。

(2) 国際交流課との関係

板橋区の場合は、組織運営の面においても特徴的な側面を持っている。一言で言えば、区役所の組織である国際交流課と上述の財団法人板橋区文

49 財団法人板橋区文化・国際交流財団交流課『平成14年度事業概要』財団法人板橋区文化・国際交流財団，2002年，3ページ。および，財団のホームページ参照。http://www.jcie.or.jp/database/j-detail/13_087.html。財団は文化事業も担当しており，例えば平成14年度の事業規模は1億3,400万円程である。国際交流関係には，そのうちの1,800万円弱であり，全体の13%ほどである。平成18年の事業規模も1億2,000万円であり，大体同じような状況である。財団法人板橋区文化・国際交流財団交流課『平成14年度事業概要』財団法人板橋区文化・国際交流財団，2002年，18-32ページ。財団法人板橋区文化・国際交流財団のホームページ。<http://www.city.itabashi.tokyo.jp/bkaikan/zaidan/sub09-gaiyou18.html>。

50 聴き取り調査より。

51 同上。

化・国際交流財団交流課とが、一心同体ということである。一般的に、行政組織の一部としての国際交流課があり、それとは別に国際交流財団とか姉妹都市友好協会などが存在することが多い。しかし、板橋区の場合には、区役所内の組織として政策経営部内に国際交流課が存在し、その国際交流課の中に「財団法人板橋区文化・国際交流財団（交流課）」が存在して国際交流推進役を担っているのである⁵²。インターネット上の「財団法人板橋区文化・国際交流財団」のホームページを見るだけでは、区役所の国際交流課と「財団法人板橋区文化・国際交流財団（交流課）」は別の物とってしまうだろう。しかし、「一心同体」と述べたように、組織上は別組織ではあるが、その組織のメンバーは同じメンバーなのである⁵³。「区の組織案内」つまり、区役所の国際交流課の職員が、「文化・国際交流財団」の「交流課」の職員は同一人物なのである。職員の方は次のように述べている。

板橋区役所内の政策経営部の中に国際交流課があるのです。…この中の財団法人の職員を、うちの方が全部兼務をしてるんですよ。国際交流の区の国際交流課長は、財団の方の交流課長でもありますし、私は財団の方の事業係長でもありますし、そういう形で兼務をしてるんですね。ですから、地方自治法で言えば、任命権者の許可を得て兼職発令をもらって、それで兼務をしているという形なんですね。（実務的には財団法人の実質的なことも）全部それでやっています⁵⁴。

52 「区の組織のご案内」、板橋区役所のホームページ。http://www.city.itabashi.tokyo.jp/kouhou/kakuka/index.htm.

53 「板橋区役所本庁舎のご案内（庁舎断面図）」を見れば、「国際交流課」と「文化・国際交流財団」が3階の同じ「政策経営部」内にあるのが分かる。板橋区役所のホームページより。http://www.city.itabashi.tokyo.jp/kouhou/kakuka/index.htm.

54 聴き取り調査より。

このように兼務方式を採用しているのは、主に財政的理由からであるようだが、この点について職員の方は次のように述べている。

財団と区の同時進行でやればいいのですが、なかなか財団の方も裾野が広がって、かなり職員が兼務してるんですが、こういうご時世なんで人件費がまず無理だということと、それから、区からの職員が当然二人でいけばいいんですが、なかなかそういう面では区の大元の財政厳しいですので、無理だろうということで、…⁵⁵

いずれにせよ、この財団の交流課と区役所の国際交流課は一心同体となって姉妹都市を含めての国際交流に関する業務を遂行しているが、姉妹都市関係全般については財団が担当し、板橋区長への表敬訪問などに関しては国際交流課が担当している。この表敬訪問は、少ない年で年間9件、多い年で17件である。ちなみに平成18年は、年間の件数は12件で来訪者数総計は113人であった。これらの内容に関して、担当職員の方は次のように語っている。

友好都市とか姉妹都市を結んでいる部分で、年間かなりのお客さんが来ますし、変わった国の方々もいらっしゃいます。…あくまで表敬訪問が主ですが、あと研修も含めて、これ以外にも結構直接学校を訪問したりするのもあるんです⁵⁶。

55 同上。

56 国際交流課のホームページを見れば分かるが、「在住外国人のための多言語生活情報」は、日本語版の他に、英語版、中国語版、ハングル版があり、それぞれの言葉で書かれており、在住する外国人への取り組みも伺える。これらのホームページの作成も、後に述べる財団のボランティアという人的資源のおかげである。国際交流課のホームページより。<http://www.city.itabashi.tokyo.jp/kkouryu>.

以上のように、財政的理由により区役所の国際交流課の職員が財団の交流課を兼任するという措置で、国際交流分野の業務を切り盛りしているのである。財団の6億という基金は確かに大きいですが、年間事業費のかなりの部分が文化事業に回っており「交流課の年間事業費」は1億円余りである。ここから地域内の外国人住民への対応や支援をも含めて多岐にわたるサービスを提供しなければならないのが現状なのである。

(3) 姉妹都市関係の活動

カナダを含めて5つの国との姉妹都市関係については財団の交流課が担当しており、バーリントンとの姉妹都市関係もこの中に入る。その他に姉妹都市関係に関連するものとして、「ボランティアを組織し運営すること」や「ホストファミリーの制度」の維持運営などが主な業務であり、板橋区の場合の特色でもある。

A. 主な業務と活動

バーリントンとの主な交流活動については前述の通りであるが、英語研修は中止され、青少年派遣は教育委員会の担当なので、財団の交流課が担当するのはバーリントンへの区民ツアーとバーリントン国際スポーツ大会に20名ほどの参加者を送り出すのが主な業務となっている。そして、実質的には二人の女性職員がこれらのプログラムを担当してきたのである⁵⁷。

現在は区民ツアーが主な活動となっているが、これについては既に触れしたので、ここではくり返さない。ただ、担当の職員の方が、「これほど毎年区民ツアーが続いているのは23区内でもウチとあともう一つぐらいしか無いようなんですよ。」と述べているように、「毎年交流したいという」区民の強い要求があり、これまで14回にわたって実施されてきたという点が大きな特徴となっている。バーリントン国際スポーツ大会は、過去の参加回

57 聴き取り調査より。

数は4回で、二年に一度ぐらいの頻度である。

さて財団の交流課に関する年間予算額は、例えば平成14年度の場合には約1,790万円となっている。姉妹都市関係は、その内の460万円余りである。さらに、この中からバーリントン関係に限れば204万円で、内訳は区民ツアーが53万円、国際スポーツ大会が146万円である。つまり、バーリントン関係は、交流課の1,790万円の予算額の1割強である。残りの約1580万円が、バーリントン関係以外に向けられているのである。その主なものには、「日本語教室」などの事業に270万円、国際交流活動に係るNPOへの助成（300万円）やボランティア・ホストファミリーの育成や日本語教師養成講座などに530万円、中国・石景山区提携5周年事業に300万円などとなっており、非常に範囲が広いのが特徴である⁵⁸。

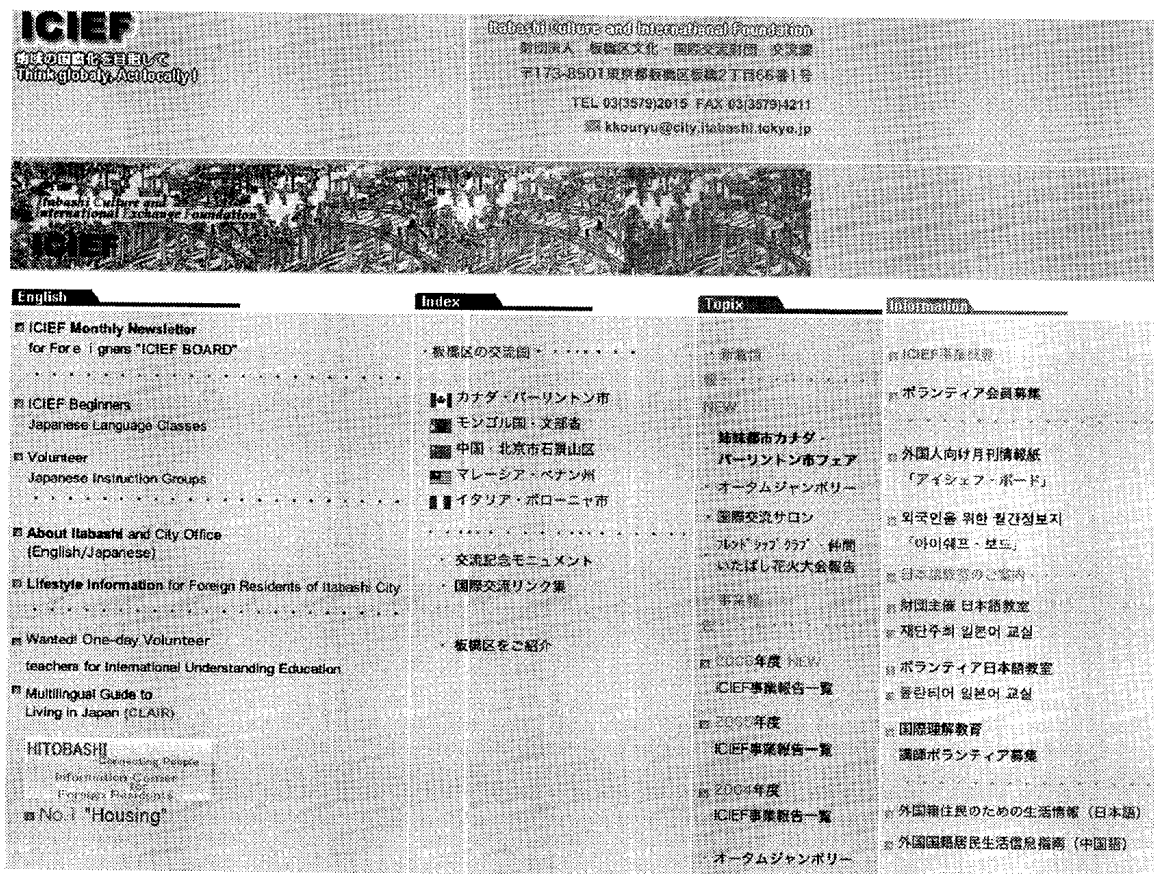
B. ボランティアの組織・運営

板橋区の場合、ボランティアを組織化し、その維持運営にも力を注いでいる点が特色と言える。財団の活動の核は、もちろん担当職員であるが、その担当職員によりボランティアと言う地域内の優れた人的資源が組織・運営され、効果的に活用されているのは注目に値する。財団のホームページにも、「区民レベルでの国際交流活動を推進するため、様々な事業について、企画から実施まで、ボランティアのみなさんの自主的な参加をお願いします。」と記載されており、現在、フレンドシップ・スマイルサークル(企画第1)委員会、フレンドシップ仲間委員会、広報委員会、インターネット委員会、日本語委員会の5つの委員会と、ホストファミリー登録制度と通訳・翻訳ボランティア登録制度が存在している⁵⁹。

58 財団法人板橋区文化・国際交流財団交流課『平成14年度事業概要』財団法人板橋区文化・国際交流財団、2002年、18-32ページ。

59 企画第1委員会と日本語委員会は、平日の昼間の活動が出来るボランティアが担当している。財団のホームページより。http://www.city.itabashi.tokyo.jp/icief/zaidan/bolun_touroku.htm.

このボランティアによる活動は、財団のホームページ⁶⁰にも具体的な形で現れている。これはインターネット委員会により作成されたものであるが、非常に力を入れているのが伝わってくる。たまたま、その委員会には「プロでホームページ関係の仕事をしている人がいて実際にその人が作っている」とのことである⁶¹。しかし、ボランティアの力を引き出すには、全体の枠組みを把握し、ボランティアを集めて目的を共有し、企画・調整・実施という流れのなかで「それぞれの能力」を発揮してもらうことが重要な課題である。従って、インターネット委員会にも、担当職員の方が一人張り付いて、会合の開催や企画・調整にかなりの時間を費やしている。当然、通常の勤務とは別の土曜日や、普通の日々の5時以降の活動ということに



板橋区文化・国際交流財団交流課のホームページ

60 写真は、板橋区文化・国際交流財団交流課のホームページより。http://www.city.itabashi.tokyo.jp/icief/

61 聞き取り調査より。

なっている⁶²。このような事情を、担当の職員の方は次のように話してくれた。

月に1回こちらの方でホームページ更新をメインとする活動をしているんですが、そういう時間では、もちろん足りませんので、担当の者がものすごく時間を割いているのです。そして、肝心の部分というのは、どうしても大きいので、いわゆる任せて独り歩きしてくれる所までは、なかなか行かないというか、そういう所までまだ難しいところがありますのでね⁶³。

もちろん委員会の中にはフレンドシップ・スマイルサークル（企画第1）委員会のように、平日に活動する委員会もある。たまたま調査に応じてくださった職員の方の一人が、企画第1委員会の担当であり、次のように話してくださいました。

このあと私、1時から財団のボランティアの企画一委員会というのがあるんです。その打ち合わせは、いつも第一月曜日に行ってたんですが、11月4日が休みの日だったもんですから、ちょっと延びてしまいました。企画一委員会というのはですね、平日活動していただく委員会なんですね。企画日というのは、土曜日とか日曜日、もしくは夜、活動してもらっています⁶⁴。

このように、まさに職員とボランティアの方々との共同作業の結果であると言ってもよい。重要なことは、地域に存在するボランティアという隠れた能力・貴重な人的資源を活用するには、それらの人たちをまとめあげ

62 同上。

63 同上。

64 同上。

能力を引き出していく資質と、かなりの時間的なコミットメントも不可欠だということである。しかし、このようにボランティアの力が活用されているように見える板橋区の場合にも、まだまだ試行錯誤の状態にあるようである。担当職員の方は次のように述べている。

私たちも、ほんとにボランティアの活用っていうか、育成っていうのは、自分たち自身も、ちょっと、よくノウハウが分からないっていうのもあるんですけども、それが課題ですね⁶⁵。

板橋区の場合には、ボランティアがかなり活躍しているが、担当職員が「ボランティア」と言う場合には、バーリントンの世界化委員会が念頭にあり、その世界化委員会をモデルとして考えているのである。それは次の表現に現れている。

ウチには、世界化委員会もないし、区民祭りをするからと言って、区民祭りボランティアも居る訳ではないわけですから、日本とカナダの住民自身のアレですよ。ええ、もう国を作った時からフロンティア精神で動いているから、そん中から、みんなで集めて作っていくって、代表で議員を選んでいくっていう…ここは、結構、「区は何をやってくれるの？」て、待ってて、こちらで提供したら参加するっていう、まだまだ、そういう感じですよ⁶⁶。

さらに、上司の方が「ただ職員の努力も相当ありまして、職員は当然移動がありますので、そう言う面では、そこの所をどうしていくのかな、と言う部分があるんですね。」と述べているように⁶⁷、組織としてのノウハウ

65 同上。

66 同上。

67 同上。

と活動能力とをいかに引き継ぎ、持続させていくのかということが問題でもある。

C. ホストファミリーの制度

姉妹都市からの訪問客をホームステイさせる所は多くなってきている。しかし、板橋区のように、ホストファミリーの制度を持ち、しかもそれを登録制度にして運営している所は多くはない。

財団のホームページにも記載されているように、ホストファミリー登録制度があり、ホームページからも登録の申し込みができる。この制度のもとに、約100名が登録されているとのことで、一見受け入れには問題がなさそうある。しかし、実際の運営となるとそう簡単なことではなさそうだ。その模様を、担当の方は次のように述べている。

よく頼んだり、依頼に応じてくださるといのは、そのうちの半分ぐらいですね。やっぱり、なかなか難しいですね。その時期に受けてくださるとい方になると、リタイアされた方は大丈夫だと思うんですが、働いている方なんていのは、こちらからお話を持っていっても、今は駄目ということが何度か続くことがありますね⁶⁸。

実際に生活に余裕のある方が多いですね。割と一軒家の方とか、ホストファミリーがですね。リタイアされて時間的にも余裕があるとか、子供が出て一部屋空いているとか…一般的にそういう人が多いです。でも、なかなか時期とか、あと希望もあったりして、例えば男性は嫌だとかですね。一人来たからといって、その人に何人ものホストファミリーの必要があるというんじゃなくて、結局、こちらから個別に、どうでしょうか、と言うのが現状なんですよ。その意味で、大変で

68 同上。

すねー。それから、ちょっとお願いするような感じになっていくことも多いんですよ⁶⁹。

このように、実際に引き受けてくれる家庭となると、様々な条件が絡んできて、なかなか簡単ではない。時間的に余裕があり部屋も空いていても、「ホストの希望」を満足させられない場合がかなりあるようである。かなりの数の家庭が登録しているものの、実際にホストファミリーが決まるまでには、担当職員の方が個人的に依頼をせざるを得ないような状況もかなり存在するようである。とは言え、以上のような状況の中で、核になる家庭を中心として30名程度のホームステイは問題なく確保できるだけの能力はあるとのことである。

2. バーリントン側担当部門

A. 世界化委員会 (Mundialization Committee)

バーリントン市側における姉妹都市活動の主な担い手は、世界化委員会 (Mundialization Committee) である。この委員会は、市民による諮問委員会として1984年に設置されている。板橋区と姉妹都市を締結する5年前のことであるが、まさに板橋区との姉妹都市関係を押し進めていくために設立されたと言っても良いかも知れない。委員会の構成員は、11名の民間人、2名の教育委員会関係者、それに議会の連絡員と行政からの担当者から構成されている委員会である⁷⁰。これだけであれば普通のことだが、この世界化委員会は一つの特徴をもっている。それは既に触れたように、「国際連合の趣旨に賛同し姉妹都市を通じて国際協力と相互理解を促進しよう」とするものである。より具体的に言えば、その任務は「バーリントン市が

69 同上。

70 “Report CL-2/03” CORPORATE SERVICES DIVISION, Clerks Department (以下、『報告書』と略す), 4 ページ。 <http://www.city.burlington.on.ca/clerks/cal/2003jan/cl-2-03.pdf>.

国際社会の一員となるように尽力し、国際社会の市民レベルでの平和的協力関係を重視する国連の理念を促進することである。」とされている。そして、委員会の具体的な活動として、以下の点を掲げている。

- ・地域レベルで国連の理念を支援し、そのために毎年「国際連合の日」を祝う行事を行う。
- ・バーリントン市が姉妹提携をしている板橋区との関係を維持していく。
- ・委員会が仲立ちとなり、板橋区とバーリントン市の両市民の間にコミュニケーションを促進し、様々な活動に参加して、お互いの相違点と類似点を認識してもらいたいと思う⁷¹。

71 『報告書』の4ページには板橋区のみが記載されているが、バーリントン市役所ホームページには、オランダの姉妹都市のアプルドーンについても記載されてる。バーリントン市役所ホームページ（“Burlington Mundialization Committee”に関する）より。<http://cms.burlington.ca/PageFactory.aspx?PageID=100>.

“Mundialization Committee”は、そのホームページにおいて、次のような組織であると説明されている。「1984年に設立された民間人の委員から構成される委員会であり、議会に報告義務を負っている。主たる責任は、バーリントン市を国際社会の一員となるように尽力し、国際社会の市民レベルでの平和的協力関係を重視する国連の理念を促進することである。ホームページには、1)具体的な目的として、地域社会において国連活動の支援を行い、「国連の日」には祝賀行事を執り行なう。2)板橋区との姉妹都市関係を継続していく。3)板橋区民とバーリントン市民の仲立ちをして、両市民に様々な活動に関わってもらい、お互いの相違点や類似点の認識と理解促進のための活動を行っていく。」“Burlington Mundialization Committee”に関するバーリントン市役所のホームページ。<http://cms.burlington.ca/Page100.aspx>.

ホームページ掲載の以上のような点の他に、ペンパルの紹介やホームステイの登録、バーリントン訪問者との交流、学校間の姉妹提携などの分野にも携わっている。一般的に姉妹都市関係においても企業活動に興味関心を持つ

一般的に言って、カナダの姉妹都市の担当部門は姉妹都市友好協会という名前がついた民間の団体が多い。行政が関わりあいを持つ場合でも、経済開発局と言った部門が担当となることが多い。バーリントンの場合のように、市役所の諮問委員会である民間の組織がイニシアティブを取り、しかも「国際連合の趣旨に沿った活動をする」と明記している例は、おそらく他にはないのではなかろうか⁷²。

さらに、姉妹都市交流に要する費用に関しても、市の財源から支出されている。例えば、経常費用として年間14,000ドル程度が予算化されているようであり、2002年の留保基金も27,000ドル余りになっている⁷³。さらに、15周年の記念事業として板橋区の区長を招いたり、バーリントン市の市長が板橋区を訪問したりする場合には、4万ドル、「コネクションズ」の美術展を板橋で開催するのに5万ドルの予算要求がなされている。しかし、この記念事業の予備費として1万ドルの追加予算の要求は却下されている⁷⁴。これらの点に関して、板橋区の担当職員の方は次のように語っている。

バーリントンは豊かなのか、10周年で市の方が15名ぐらいこちらに来たんですよ。その時に自費ではなくって、市からお金が出ているんですね。市長さんも議員さんも世界化委員会も、それからフットノーツって言って、タップダンスの人達の分も市からでてるんですよ。だから、その人達の公演も市からのプレゼントと見なしているわけなん

ているカナダの自治体が多いだけに、このように市民レベルで国際的な協力関係を築こうとする姿勢は、珍しいと言える。しかし、この委員会の場合にも、日本とのビジネス提携に関しては、委員会発行資料の最後の方に触れられており、除外されている訳ではない。Burlington Mundialization Committee “Opening the Door to the World,” City of Burlington より。

72 筆者はこれまでに、日本と姉妹都市を締結している15のカナダの自治体を訪れたことがあるが、このような例は皆無であった。

73 『報告書』, 15 ページ。

74 同上, 2 ページ。

ですね。時計とフットノーツということで、プレゼントなんです⁷⁵。

このように姉妹都市交流に要するかなりの部分がバーリントン市の行政の負担となっている。姉妹都市に関わるこのような経費を公的に負担するというのは、日本では普通のことであるが、カナダの場合は必ずしもそうではないので、市当局と市民の姉妹都市に対するコミットメントの大きさを現しているものと理解できる。

この委員会は、元来「国際連合の趣旨に賛同」して姉妹都市交流を行い国際理解を促進しようとする目的で設置された民間の組織であるが、以上のようにバーリントン市からの公的予算の配分を受けるとなると、やはり地域社会への経済的メリットを考慮せざるを得なくなるのかも知れない。と言うのも、バーリントン市のホームページには出てはいないが、委員会の報告書には「マンディアライゼーションと経済発展」の項目をもうけ、次のように経済的メリットについて言及されているからである。

バーリントン市は、21世紀にあたり姉妹都市関係における経済的側面を探究したいと思う。このためには文化や教育分野に焦点を合わせるだけではなく、次なる段階である姉妹都市との経済関係の進展に向かうべきである。

商業や経済ということについては、姉妹都市関係において相互に利益が得られるべきだと考えている。…バーリントンとして予想される経済的利益として、当地と訪れる観光客の増加なども考えられる。当市と板橋とのビジネスの相互交流も経済的利益を生み出すであろう。…このために1～2年中に板橋区への経済ミッションの派遣が考えられる⁷⁶。

75 聴き取り調査より。

76 『報告書』, 11-12 ページ。

こうして、板橋区へ経済ミッションを派遣する費用として20,000ドルが申請されるなど、かなり具体的な数字も出てきており、さらに必要とあれば追加資金も考えられている⁷⁷。

以上のように、世界化委員会は国際連合の理念に基づき姉妹都市関係を発展させていくという趣旨で設立されたユニークな背景を持っている。しかし、行政からの財政的支援の増大とともに、経済的なメリットの追求を姉妹都市活動の目的の一つに挙げざるをえなくなってきたような感もある。バーリントン市の中に「東洋的な趣がある」"Itabashi Garden"を造るという構想もあるようで、その役割として文化面や教育面の効用だけでなく、観光面での利益も考慮に入れているようであり、現実的な方向に軌道修正を計っているようにも思われる⁷⁸。

B. バーリントンでのホームステイ

姉妹都市に関係する様々なホームステイも、この世界化委員会が担当している。そして、この点にも一つの特徴が見られるが、それについて板橋区の職員の方は次のように述べている。

バーリントンは、お金取らないのは理由があるんですよ。ある程度の生活の余裕がある家庭を選んでもんですよ。移民の方もいるでしょ。別に差別するわけではないんですけど、貧しい家庭の人たちもいるんですね。そうすると、ホームステイを商売にしたいと思っている人も居るんですよ。それで、もう、ほんとに善意の気持ちで、キリスト教的な考え方で、ボランティア精神で受け入れてくれる、ある程度の収入家庭って言うんですか、そこをターゲットとしているもので、無償にしているんですって。それがバーリントンのやり方なんですけど、ウチは申し訳ないから、少し謝礼を払いますからって、そんなに集める

77 同上, 12 ページ。

78 同上, 14 ページ。

のが苦勞するんだったら、謝礼を出しますからって言うんですなんですけど。そうすると、質が落ちるからってね。質をキープするためには、無償ですって、それが条件になってるようですね。…語学研修以外にも今回スポーツ大会で、子供達が行った時も、ホームステイをやっぱり、引き受けてくださってるんですね。…⁷⁹

姉妹都市交流の中でのホームステイについては、ホストファミリーとなる家庭は無償で引き受けるのが普通である⁸⁰。そして、バーリントンには上記のように様々な家族が存在していることは確かなことだが、平均所得は\$41,070、世帯当たりの平均所得は\$93,773であり、中流階級の上部に属する家庭が多いと言える⁸¹。そのような中でも、世界化委員会は「余裕があってボランティアの精神で受け入れてくれる家庭」を確保しようとしてくれているのである。

バーリントンのような割りと豊かな地域であっても、ホームステイの確保は容易なことではない。それは、一般的に言って、日本側からの訪問者の方が、カナダ側からの訪問者よりも多いという事情がある。板橋区の場合も同様であり、6月から8月の間にバーリントンを訪れる人は100名近くになることもある。これらの人々に良質なホームステイを提供することは容易なことではなく、一軒のホストファミリーが2、3人を引き受けるということもやむを得ないことである。さらに、この夏の時期には、コミュニティー・カレッジなどでも様々な夏期英語研修やサマープログラ

79 聴き取り調査より。

80 日本の場合は、自治体により交通費とか食費の一部を「お礼」としてホストファミリーに支払う場合も少なくない。

81 所得については、バーリントン市役所のホームページ“Federal Census 2001”の項目を参照。<http://cms.burlington.ca/PageFactory.aspx?PageID=500>.

ムが実施され、一挙に数百人の学生がやってくることになる。そして、人口15万人余りの町で、数百人の学生に対するホームステイが必要とされるが、このような状況の下では従来のような「良質なホームステイ」を提供することは不可能なことである。こうして、ここに「ビジネスとしてのホームステイ」が生まれることになるのである⁸²。このような状況の中で、世界化委員会が依然として「姉妹都市における良質なホームステイ」を提供し続けるという努力は評価に値するものである。

IV. 相互作用による影響

姉妹都市活動においては、様々な分野においてカナダ人やカナダ文化と接することになる。交流事業を企画・立案・実施にあたる財団や区役所の担当者はもちろんのこと、一般区民の方々もホストファミリーとしてカナダ人を受け入れたり、あるいはバーリントンを訪問して、カナダ人に接することになるのである。それでは、これらの過程で、カナダやカナダ人に接することにより、どのような影響を受けるのだろうか。

1. 板橋区側への影響

(1) カナダからの訪問団に接して

相互交流という視点から見ると、バーリントンから板橋への訪問回数の方が少なく、不均衡な状態である。しかし、回数が少ないからと言って、あるいは不均衡な状態だからと言って、インパクトが弱いということにはならない。例えば、提携10周年記念にバーリントンから市長を団長とする市民代表団と市民タップダンスグループ「ザ・フットノーツ」⁸³が板橋区を

82 ビジネス化されるホームステイに関しては、次を参照のこと。井上真蔵「カナダとの姉妹都市関係——何を学ぶか——」、『めいふる』北海道カナダ協会会報第71号・創立25周年記念号、北海道カナダ協会、2004年、32ページ。

83 写真は、「板橋区・バーリントン市姉妹都市提携10周年記念——バーリン

訪問し、区民まつりに参加した時のことを見れば、カナダからの訪問団がどのようなインパクトを与えたのかがよく分かる。財団のホームページには次のように書かれている。

「年齢というものは気持ちのもちかた次第なのだ」。ピアノの生演奏を伴奏に、歌って踊れる元気なシニアの一団は、活動的な人生とはどういうものかというメッセージを送ります⁸⁴。

この時の状況について、担当職員の方はさらに詳しく次のように説明してくれた。



「ザ・フットノーツ」（財団のホームページより）

トン市長他市民訪問団の来訪」板橋区文化・国際交流財団交流課のホームページより。 http://www.city.itabashi.tokyo.jp/icief/twin/burlington/y10aniv_%82%8Aita.htm#fnotes.

84 「板橋区・バーリントン市姉妹都市提携 10 周年記念 — バーリントン市長他市民訪問団の来訪」財団のホームページより。 http://www.city.itabashi.tokyo.jp/icief/twin/burlington/y10aniv_%82%8Aita.htm#fnotes.

フットノーツのパフォーマンスを文化会館で見てですね、こんな格好してイイんだ。こんな可愛い服着てイイんだってね。変わるんですよ。女性たちが。同じくらいの年代の女性たちが、変わるんですよ。こう言うのが、カルチャーショックと言うんですかねー。自己改革って言ってもいいんですよ。幾つになっても、あるんですよー⁸⁵。

「自分と同じ年格好のカナダの女性」が「日本の常識では、とても想像もできない若々しい服装をして」、目の前でタップダンスを踊るのである。この「ザ・フットノーツ」とは、55歳以上の女性10名、男性1名のバーリントン市民で構成されているグループなのである。「こんな可愛い服着てイイんだ」と言う言葉に現れているように、まさに「想像したこともない事態が目の前で繰り広げられ」て、考えてもいなかった意識の変化が起こるのである。筆者自身、若いころ7年間東京に住んだことがあり、「世界の大都市東京に住む人たち」は何となく慣習からは自由な都会人のイメージがあったものだから、正直言って、上のような発言には驚いてしまった。そして、改めて、異文化カナダと直に接することにより、信じられないほど大きなインパクトを受けていることを感じた次第である。

(2) カナダを訪問して

A. 板橋区民ツアー——自己を変える旅

a. バーリントンで日本再発見

区民ツアーに応募する人たちは、カナダに憧れ外国に憧れて参加する人が多いようである。そして、この人たちの中には、バーリントンを訪問しカナダ人と接することにより、全く考えもしなかった意識変化を経験する人が多いとのことである。「行く前には頭の中になかった日本のこと」を意識させられて帰ってくるのである。この点について、担当職員の方は

85 聴き取り調査より。

次のような観察をしている。

やっぱり、板橋区民の区民ツアーなんかでも、参加者は白人への憧れてと言うか、欧米への憧れて言うか、すごく最初は強いんですよ。だけど、行って帰ってくると、やっぱり日本人であると言うことを、すごく意識させられるんですね。…日本ではどうなの、日本人はどう思うのって、すごく聞かれますので、日本人代表として帰ってくるわけですよ。帰ってくる時は⁸⁶。

とりわけ、このような傾向は男性に目立つようで、「男の方ですと、そういう感じでね、自分革命と言うか…変わるんですね。それが、見てるとほんとうに面白いんですよ。」と言うくらいの変化が見られるようである⁸⁷。

出発時に、まさかカナダに行って日本の事を聞かれるなどとは夢にも思っていない。そして、多くの場合、日本の事は満足に知らない自分自身に気づき、カナダという異国で初めて日本のことを考え始めることが多いのである。このような事は、姉妹都市という枠組みの中でホームステイをして直接カナダ人と接することにより体験できることなのである。単なる観光旅行では起こり得ないことなのである。

b. お洒落をしても良いんだ（日本的規範の変化）

女性の方は、また異なった点で影響を受けるようである。例えば、10周年記念の時には、総勢107名がバーリントンを訪れて、お琴と三曲、タコの会、和太鼓の会などが、サウンド・オブ・ミュージック・フェスティバルに参加した時のことである。その時の模様を、職員の方は次のように回想している。

86 同上。

87 同上。

新しい経験した時の感じ方って、年齢関係ないですよ。こういう所へ行った時のオドロキとかね。(別の担当者：それは、私もビックリしちゃった。)みんな、スゴク、スゴクねー、変わるんですよ。イッパイ人生経験を蓄積されてリタイアされた方でも、スゴイ驚いて。こんなカワイイ格好して良いのねって。次の日から、お洒落になったりするんですよ。ほんとに、そういう事がありますよ。(別の担当者：何となく、自分の中で、日本ではコレはダメなんじゃないかということが、カルチャー・ショックで、なくなるんですよね……)⁸⁸

日本とは異なった環境の中で、今までは「何となく、してはいけない事」と思っていた「考え方」や「行動の仕方」が、異なる「カナダ人の生活様式という現実」を目のあたりにして、取り払われるということであろう。「こんなカワイイ格好して良いのね」という感覚を自分のものとするという事は非常に大きい。異文化による自己変革の経験である。このような区民ツアーでの経験談は、毎年次に行く人達に話してもらっているとのことであるが、やはり自分で異文化の中に身を置かないかぎり分からない事であろう。

c. お土産文化は変わらない

以上のような目に見えて明確に分かる変化の他に、「変化を受けにくい部分」もある。それは、日本人として確立してきた「物事のやり方」、あるいは「型」に関する部分と言ってもよいだろう。まずは、他家を訪問する際に真っ先に頭に浮かぶのは土産物のことであり、お土産の習慣は日本人にとっては非常に大事な事柄なのである。カナダを訪れる時も同様と言うよりも、普通以上に気を使うことかも知れない。カナダでの習慣が分からないだけ、余計に気にかかるのである。担当の職員の方は、次のように述

88 同上。

べている。

お土産交換については、よく聞かれます。その時の服装とかも。日本人は、ほんとにこだわりますからね。私たちは、お土産はキチッと渡したいというのがあって、品物もどういうモノが良いとか。だから、区民ツアーの時には、よく行く方から聞かれるのは、お土産交換の部分が大きいんですよ。渡す時の服装もラフな服が良いのかとか、誰が渡すのかとか、どういうタイミングで渡すのかとか、段取りを決めたがるんですね。事前に全部、そういうのを聞いていきますよね。その段取りを、最初はやっぱり職員としてコーディネートするのに大変だとか、珍しいという一面もあったんですけども、実際それをしないとですね、全然ダメなんですよ⁸⁹。

このように、段取りを聞いておかないと不安なのである。そして、向こうで初めて経験をしてくるのだが、フォーマルな場で渡すのかプライベートに渡すのかなど「渡す状況も異なっているようで」、その結果は、人により様ではない。職員の方によれば、「色んな考えがあって、お土産を全部そろえて行けば良かったという人も居るし、みんな、それぞれ違うお土産を持っていけば良かった」と言う人も居るようで、体験から得られる結論は異なっている。そして、この職員の方は最後に次のように語ってくれた。

だけど、カナダの人は、ほんとにアバウトで、気持ちでドーズという感じなんですよ。カナダの人は、こだわらないですよ⁹⁰。

このような言葉は、かなりの経験の蓄積と相手側に対する知識があって初めて発せられる言葉である。つまり日本人にとっては「まず第一に頭に

89 同上。

90 同上。

浮かび非常に大事なお土産」も、カナダ人はそれほどの重大関心事ではないということである。そして、こんな風に言われても、普通は「なかなか心がついていかない」のである。端的に言えば、短期間なのでカナダ人の「お土産観」の理解まではいかず、日本の「お土産文化」の根本が影響を受けるわけではないのである。従来のお土産文化に、「場所とか相手」により「同じもの」を渡すか「異なるもの」を渡すかと言ったバリエーションが付け加えられるのである。従って、この段階で「カナダ人の土産文化」が「理解できた」と思い込む危うさはある。日本的な土産に関する考え方が根本的に影響を受けるのは、カナダに住んだりカナダ人と頻繁に接触したりして、日本のやり方とは異なるカナダ人の「やり方」に出会うことにより初めて起こり得ることであろう。

d. バーリントン滞在がもたらすインパクト

板橋区民ツアーがもたらす影響は、上に述べたようなこともあるが、何よりも「カナダ的やり方」と言うか、より正確には「バーリントンの受け入れ全体」が与える影響であろう。それは、世界化委員会を中心としたボランティアによる受け入れシステムを体験することである。まさに異文化であり、日本では経験したことのないことである。その結果、区民ツアーから帰ってくると、板橋区の財団にボランティアの申し込みをする人たちも多いということになるのである。この模様を、職員の方々は次のように述べている。

区民ツアーから戻られて、ウチの方の財団の方のボランティアさんになられる方も多いんですね。そうしますと、もう何年も前の話なのに、このバーリントンの事って、よく話しますよね。あの時は、こうだったって。バーリントンの人達は、板橋区民が行くのを楽しみに待っていてくださって、暖かく受け入れてくださいます。スケジュール通りに行かないことがあっても、後はもうスゴク良かった、もうバーリントンが一番良かった、ってなるんですよ。バーリントンへ行った時は、

ボランティアでここまで親切にしてくれて、ありがたいという感じがですね。良い思い出だけで、みなさん帰ってこられると思いますね。バーリントン以外に、観光で、トロントに行ったりオタワに行ったり、モントリオールに寄ったりするんですよ。それは、年ごとに違うんですけども、結果として、アンケートをとると、やっぱり、姉妹都市に居た、バーリントンに居た間の何日間が一番良かったという風に毎回出るんですよ。それほど、姉妹都市の交流が暖かいものになるんですね。交流が良いから。世界化委員会、ほんと、よくやっているとと思います⁹¹。

既に上に述べたように、バーリントンにおける受け入れ活動は、ボランティア組織である「世界化委員会」が主体的に行っている。人口16万の都市で、30名の区民ツアーをホームステイさせ受け入れるのである。日本であれば、ボランティア組織が行動主体となり受け入れるということは、まずは経験しないことである。そしてトロントやオタワやモントリオールの観光は面白いに違いはないが、いつまでも記憶に残る体験はカナダ人と時間と空間を共にするバーリントンということである。そして、そこでの「ボランティアの活動」に触れて、自分がしてもらったのと同じことを板橋区を訪れるバーリントンの人たちにもしてあげたいと思うようになるのである。バーリントンでカナダの人々の「カナダ式やり方」に触れることがなければ、このような行動の変化も起こることはなかったことだろう。

(3) 担当部局への影響

A. カナダのお役所

バーリントンとの姉妹都市活動に直接関わってきた板橋区の職員の方々は、その仕事柄相手方の担当者と接触する回数も多いし、何よりも行政の

91 同上。

目でカナダを見て、解釈しようとしている。それは担当者の次の言葉にも現れている。

議員さんというのも、市民の代表というか、何しろ、市役所が小さいですからねー。いかに市民が政府を作っているかっていうか、自立しているかっていうのが、よく分かりますよね。(市役所の写真を示しながら) ここにありますよ。小さいですよ。そして、何しろ、オドロクべき事には、マネジャーは別ですが、職員は仕事がない人達をやとって仕事をさせているということ。市役所の私たちの一般の事務の人達というのは、一番下のレベルだということで…コーディネート能力というのは、全然ナシと言うか、要らない。ただ、ほんとに、例えば決められた手続きの事をやって、書面にハンコ押したりとか、(写真を示しながら) これだけです。ウチで言うと、出張所かなんか支所みたいなもんです。これが、もう市役所なんです。いかに、これだけで間に合うかということなんです。これだけで、間に合っちゃうんです。(別の職員：スゴイですね。間に合わないよねー。)⁹²

このように、餅は餅屋と言うか、板橋区役所の職員の中で「見るべきもの」を見ているのである。そして、同じ社会でありながらも、日本のように行政の役割と存在が非常に大きい社会とは別に、市役所の建物も小さくて最小限の人員で行政の役割が果たされている社会が存在しており、その存在を実際に自分自身の目で見るのである。「スゴイですね。間に合わないよねー。」と言う言葉には、「日本では不可能」だという気持ちと、「よくそれで間に合うものだ」と言う半ば「呆れている」感じも含まれている。しかし、日本では決して考えられない行政のあり方に出会い、そのような存在が可能なのは、それは「市民が自立しており、その市民が政府を作って

92 同上。

いる」との解釈に至るのである⁹³。

B. 姉妹都市活動の基本はボランティア

板橋区で姉妹都市活動に関わってきた担当職員の方々が、その業務遂行する中で感じる一番の違いはボランティアの存在とその役割の違いである。もちろん、ここで言うボランティアとは既に何度か触れた世界化委員会のことであるが、担当者の方は次のように述べている。

アコさんとか今のデービッド・トゥルーマンさんとか、委員長の方はかなりお仕事をしていますよね。バーリントンの方はボランティアベースなんですね。ですから、どちらかというところ、板橋区の方が、かなりプログラムを綿密に作ってですね、キチッと作ったもので、これに対してこういう事ができますかって言って、こちらの方から当たっていくという感じですね。それで、こちらの要望に応じてくれるというような具合ですね⁹⁴。

ここには、まず板橋区の担当職員が綿密にプログラムを作成し、それを基にボランティアの世界化委員会に要望を伝え、さらにそれに対して世界化委員会が応えていくという「やり取り」が存在する。そして、その過程を通して、担当職員が感じるのは、二つの社会における物事の決め方の違いである。この点について、担当職員の方は次のように語っている。

姉妹都市交流は、どこの国にしてもやっていますけども、やっぱり、私たち日本の場合は官が中心になってやってきたという感じですね。仕事でやっているんですよ⁹⁵。

93 同上。

94 同上。

95 同上。

バーリントンのようにって。いつも憧れです。あんなにしてくださって。自己責任があって。まだまだウチは、ネットの中の段階ですからね…。なかなか難しい。(別の職員：ボランティアさんも、それを望んでいるところかなって…。自分たちでやるのは、「ちょっと」という感じで…) あまりにも忙しいし、役所の手伝いはするけれども、自分たちが何か考えてって言うのは、ちょっと待ってっていう、感じで…これが課題と言えれば課題ですね。なかなか市民レベルの交流になってくれるには、それが課題ですね⁹⁶。

ここに明確に述べられているように、まさに「行政が物事を動かす社会」と「市民が物事を動かす社会」の違いが認識されている。バーリントンの世界化委員会とのやり取りを通じて、初めて日本社会とは異なる物事の決め方があることを知り、カナダ社会におけるボランティアの役割を認識するのである。そして、「自分たちでやるのは、『ちょっと』」という言葉が示しているように、二つの社会の違いを認識しながらも、バーリントンを手本にしたいという強い思いを持つに至っているのである。

C. カナダ流仕事術

異文化と接するということが、自分達とは異なった「考え方」や「やり方」の人たちと共に仕事をするということでもある。こう言ってみれば簡単に聞こえるかも知れないが、例えば「バーリントン国際スポーツ大会」の開会式が、定刻より2時間遅れで始まったとしたら、どうであろうか。このような点について、担当職員の方は次のように語っている。

最初はやっぱり職員として段取りをして、コーディネートするのが大変だとか、珍しいという一面もあったんですけども、実際それをし

96 同上。

ないとですね、向こうの方は、ほんとうにその場で何でもしようと思えますから、全然ダメなんです。例えば、スポーツのバーリントン国際スポーツ大会っていうのがあるんですけども、あれも、開会式が平気で2時間遅れたりするんですね。それで、職員が随行として行きますと、2時間遅れるというと、自分だけなら良いんですけども、子供達や親御さんも引き連れて開会式に臨んで、そこで2時間待たされるということには、やっぱりですね、非常に腹立たしいし、キッチリこっちは何時に行くよというスケジュールを、もう分刻みで伝えてあるのに、どうしてだ、という思いはありますね。ただ、それは、もうこれまで重々と先輩たちが色々文句を言ったり、交渉事をしながらやってきましたから、大分良くなってきたらしいんですよ⁹⁷。

この話には、「分刻み」で行動する日本と「アバウト」な行動をするカナダとの違いが現されているし、担当職員の方も「その違い」を適切に認識している様子が伝わってくる⁹⁸。そして、そのような認識が最初からあったわけではなく、何度かそのような状況に出会い、かつ先輩達の教訓からも学んでいることが分かる。しかし、普通の日本人にとっては、このような状況で2時間遅れの開会式という「カナダ的アバウトな行動」は、生まれて初めて出くわす事柄であり理解不可能な事柄なのである。従って、その苦情の矛先は随行している板橋区の職員に向けられるのである。その様子を、職員の方は次のように語っている。

そういう状態の中で、日本人側がどちらにね、怒りをぶつけるかと

97 同上。

98 担当者の口からは、この「アバウト」という言葉の他にも、「カナダの人は、こだわらないですね。」という表現にあるように「こだわらない」と言う言葉も聞かれた。

いうと、区の私たちの方にぶつけるんですよ。なんで2時間遅れたんだ。何で前もってちゃんとしなかったんだ。板橋区側が、キチッと打ち合わせをしていれば、こんな事にならなかったんじゃないか、とかね。そう言う風に、風当たりが強くなるんですよ。ちゃんと、ここにプログラムとかスケジュール表があるのに、何で2時間遅れたんだ。うち合わせが足りなかったんじゃないか、とかね。(別の職員：しかし、ウチは、スケジュールを英訳してまで、向こうに送ってますからね。) そうなんです。それでも、もう苦情はイッパイ来るんです。そして、それでも、カナダ側はもう平気でコロコロ(予定が)変わりますよね⁹⁹。

ここにあるように、板橋側のスケジュールは「英訳」をして相手方に渡されているのである。しかし、「分刻み」の「日本的行動様式」はカナダでは通用しない。さらに、板橋区の担当者の中には「もちろん2時間遅れの開会式は日本では考えられない」が、同時に「ボランティアが全てを組織し動かしているということは大変な事だ」という認識があるが、その場にいる区民には「そのような事情」は共有されてはいないのである¹⁰⁰。そのような状況の中で、担当者の方々は「怒りの矛先が板橋区職員に来るというのは分かるんですね。それも、仕事と言えば仕事ですから…。」と言うように「自分たちの役割」を理解している¹⁰¹。まさしく、「カナダ的アバウトな行動様式」と「分刻みの日本的行動様式」の間に立って、適切な異文化インターフェイスの役割を果たしていると言えるだろう。

99 聴き取り調査より。

100 この時の状況について、担当者の方は次のように述べている。「そうですね。かなりアバウトですよ。向こうは。だけど、日本とは違ってボランティア・ベースでやってますよね。あのボランティアが中心のコミティーを作って、すごく自立してるから、みんなボランティアが自主的に運営してるんですよ。」

101 聴き取り調査より。

2. バーリントン側への影響

影響を受けているのは、日本側だけではない。ホストファミリーとして、板橋区の人たちを繰り返し受け入れていることにより、バーリントンの人々も同様に影響を受けているようである。

(1) 家の中には日本文化が

まずは、何度も何度も板橋区の人たちを受け入れることにより、カナダ人の家庭の中に「日本」が存在するようになる。この点に関して、担当職員の方は次のように語っている。

結構、もう受け入れしてくれているファミリーは、常連なんですよ。家の中に日本的なモノがあって、いつも贈られてきてるでしょ。屏風なり人形なりが飾ってあったりとか。…嬉しいですよ。日本のものを飾ってくれて。そうなってくると、面白いですよ。お互いに¹⁰²。

そして、ホストファミリーによっては、「日本のモノ」だけではなくて、日本の「味」も存在するようになっているようである。カナダ人の家庭の中に「日本の味」が存在するようになると、これはかなりの変化である。担当職員の方は次ぎのように述べている。

ホームステイなんかだと、女の子がご飯炊いて、ちょっと日本食を作ってあげたり、そういうのは毎年ありますね。海苔持ってったりとか。梅干し持ってたりとか。必ずありますけどね¹⁰³。

一般的に言って、海苔とか梅干しなどは従来あまり歓迎されなかったよ

102 同上。

103 同上。

うであるが、職員の方の一人は「イヤー、梅干し好きですね。毎年、梅干し送ったりとか。漬け物なんかも送っていますよ。」と述べ、別の職員の方は「そういうのに、かなり慣れてきているというのがありますね。」と述べている¹⁰⁴。かなり慣れてきているのは確かであろうが、日本の味をも理解しようという態度が存在しているものと考えられる。同時に、トロントのスーパーにもパックに入った「細巻き」の寿司が並んだりしている状態であり、日本食ブームもその背景にはあるものと思われる。いずれにせよ、カナダ人が家庭の中で海苔、梅干し、漬け物などを食べている様子は、今のところまだ不思議な感じがするが、板橋区の人たちを受け入れたことによる明らかな変化と考えて良いだろう。

(2) 姉妹都市担当部署への影響

バーリントン側の姉妹都市活動を荷なっている部門も、板橋区役所の担当者と頻繁に接触することにより、影響を受けるようになっている。世界化委員会の報告書にも、「日常的レベルにおいて、本委員会の委員長とその他の委員も、板橋区と頻繁にやり取りを行っている。板橋区と電子メールによるやり取りは非常に有効である。」と述べられているように¹⁰⁵、お互いに相手側の理解もかなり進んでいるようである。その過程において、バーリントン側にとっては、板橋区の姉妹都市活動における行政の関わり方が新鮮に映るようである。報告書は次のように指摘している。

バーリントンのアプローチと比較して、板橋区は行政組織内に国際課が存在するということである。これにより、板橋区は6つの姉妹都市に関連する業務の調整と統括を行っているのである¹⁰⁶。

104 同上。

105 『報告書』, 16 ページ。

106 同上。

このように板橋区においては行政内部の国際課という組織が姉妹都市活動を担当しているという認識にたつて、世界化委員会はバーリントン市が財政的ならびに人的に、姉妹都市活動に積極的に関わるように要望しているのである。この点に関して、報告書は具体的に次のように述べている。

5年毎の記念行事を行うには、相互訪問にかかる旅費や受け入れ事業の経費、そして記念品やお土産代など、追加の予備費が必要である…¹⁰⁷

現在の予算の中に追加資金を組み込み、市当局の世界化活動と関連する経常活動や記念事業を行うにあたり十分な資金を確保することを提案する。このことは、バーリントン市が姉妹都市関係に関わる真剣さの度合いを示すものである。板橋区が行っているように、バーリントン市民がビジネスに関連するものであれ個人的な理由によるものであれ、姉妹都市交流に参加するという点において、本委員会は議会に対していくつかのオプションを提示することができる。未来に目を向け、バーリントン市が「世界市民を目指すコミュニティー」の地位を得たいのであれば、何らかの財政的支援が真剣に考慮されなければならない¹⁰⁸。

以上のように、世界化委員会は板橋区の姉妹都市活動を念頭において、バーリントン市当局からの財政的かつ人的支援を求めているのである。人的支援に関しては、2003年度の予算において、市役所内部に非常勤職員を配置し世界化委員会の業務を支援することになっている¹⁰⁹。

さらに、板橋区との姉妹都市関係を発展させる試みとして “Itabashi

107 同上，15 ページ。

108 同上，16 ページ。

109 同上。

Garden”を造る案などが出てきているが、報告書に書かれた次の例を見れば、板橋区の行政の在り方から学ぼうとしている様子は明らかである。報告書は、次のように提案している。

毎年、「姉妹都市を祝う日」を特別に設置するということも考えられる。その日には文化的な催し物や美術展示会を行い、それぞれの都市の伝統的な衣装や食べ物などを出したりする。また茶の湯を行ったり、地域特有の出し物を披露したりして、最後は花火で締めくくる。言わば、板橋区が荒川の岸辺で毎年8月の第一土曜日に行う花火大会のようなものです¹¹⁰。

バーリントン側が上に見てきたように、様々な点で板橋区の行政のあり方からヒントを得て、姉妹都市活動をより活発にしていこうとしているのは、非常に興味深いことである。と言うのも、なかなか「相手のやり方」をこんな風に積極的に取り入れようとするのは珍しいからである。その理由として、次のように考えられる。世界化委員会の委員長経験者は板橋区をたびたび訪れているし、日常的なレベルでも板橋区の担当者たちとメールによるやり取りが行われている。そのような過程を通して、カナダでは見られない「板橋区役所の物事の進め方」に出会い、それらを見習ってみようとしているようである。自分たちとは異なる「相手のやり方」に出会い、それを理解するというところまでは、感受性に富み柔軟な心があれば出来ることかも知れない。しかし、そこから一步踏み出して、相手方のやり方を「自分たちの社会に取り入れてみよう」とすることは、相手方に対する理解のみならず、相手を信頼し好ましく思う気持ちがあって初めて可能になると言えよう。

110 同上。

おわりに

板橋区とバーリントン市の姉妹都市関係は一体どのようなものなのかと言う問にたいして、提携にいたる過程、担当部署の特徴や活動の実態、相互作用により受ける影響などに焦点を合わせて考察してきた。そこには、日本とカナダの姉妹都市関係において一般的に見られる特徴と共に、板橋区とバーリントン市の場合に見られる固有の特徴も存在していた。ここでは、それらの点を含んで板橋区とバーリントン市の姉妹都市関係の考察から得られた重要ないくつかの点について触れておきたい。

まず第一に、1989年の提携以来、18年にわたり様々な活動が活発に行われてきたという点があげられる。その主な要因は、板橋区とバーリントン市における姉妹都市交流を望む強い意思とイニシャティブの存在である。提携時にも見られたように板橋区の首長は国際交流の分野において伝統的にイニシャティブを発揮してきているが、それは姉妹都市記念行事の度にオンタリオ湖の夏空に上げる Itabashi Fireworks という形になって現されている。とりわけ10周年記念に贈った25万ドルの花火はそのことを如実に物語るものであろう。同時にバーリントン市側においても、国際連合の趣旨に賛同して世界平和のために姉妹都市交流を押し進めていこうとする「世界化委員会」という民間団体の存在があったからである。まさに、「官」対「民」という、日本とカナダの姉妹都市交流の一般的な関係を現すものではあるが、板橋区長のイニシャティブと世界化委員会の積極的な関与があって、これまでの活動が可能になったのである。

第二として、活発な交流活動は行われてきたものの、板橋区とバーリントン市の姉妹都市交流においても、日本とカナダの姉妹都市活動に見られる一般的な傾向が当てはまるということである。それは、簡単に言えば、板橋側からはバーリントン市を訪れる回数が、バーリントン市側から板橋区を訪れる回数よりも多いということ、つまり、交流が偏っていて双方向にはなっていないという点である。この主な理由は、日本とカナダにおいて行政の関わる役割が異なっているためである。一般的に日本の姉妹都市

の場合は、行政から何らかの補助がするのが普通である。板橋区の場合も、英語研修や青少年相互派遣がこれに該当しているしバーリントン国際スポーツ大会への派遣も同様である。これとは対照的に、カナダ側から日本を訪れる場合は、自己負担で来日するのが普通である。そのような状況の下で、青少年相互派遣については唯一の「バランスのとれた相互交流」であったが、バーリントン側がかなりの努力を注いできた結果であると理解してよいだろう。

第三に、板橋区の国際交流分野における創意工夫があげられる。それは、組織的には区役所の政策経営部内に存在する国際交流課と文化・国際交流財団の交流課は別のものであるが、実際は国際交流課の職員が交流課の職員を兼務しており、一心同体となって動いている。つまり、姉妹都市活動を担当する交流課に専任職員を配置することなく、兼任職員により財政的負担を軽減しようとするものである。実際、文化・国際交流財団の基金は6億円と大きいですが、年間の予算規模は1億円余りで、そのうちの2,000万円程度が国際交流の分である。さらに、この国際交流分野も地域内の国際交流に関わるNPOやボランティアの育成、日本語学習関連などにかかなりの額を割いており、バーリントンとの姉妹都市活動について言えば200万円ほどである。このように、板橋区内において行う国際関連分野の事業が相対的に増加してきていると言える。そして、職員の兼務というのは、上のような状況の中で、何とか国際関連業務を押し進めていこうとする工夫なのである。

第四に、残念なことではあるが、板橋区の場合も財政的理由により重要な派遣プログラムが廃止されたということである。財政的理由による姉妹都市活動の縮小は、全国的な傾向になっている。上にも触れたように、「民間が出来ることは、民間に任せようというところもあるんですよ。」と担当職員の一人が語っているが、このような空気はかなり濃くなってきているようである。しかし、本論でも指摘したように、姉妹都市という枠組みの中で、板橋区民が姉妹都市バーリントンで英語研修を行い、カナダ人の家庭でホームステイをするということは、「民間が出来ること」とは根本的に

異なっているのである。根本的な違いとは、「民間はビジネスのため」に、「姉妹都市関係は相互理解と友好促進のため」にである。そして、とりわけ重要なのは、日本の青少年たちが「カナダという異文化」の中で「日本国内では決して手に入れることができない」経験をすることである¹¹¹。板橋区民の中には、中学生と高校生の青少年派遣プログラムの復活を望む声は大きい。このような意味でも、バーリントンで行う研修やホームステイを全面的に廃止するのではなく、費用は自己負担という選択肢をも含めて、復活の道が考慮されるべきであろう。

第五に、板橋区の特徴の一つとして、姉妹都市活動における市民参加の基盤作りを積極的に押し進めている点である。これは、ボランティアの育成と活用、そしてホストファミリーの登録制ということがある。これらは、他の自治体と比べてみて非常に活発であるのは既に見てきた通りであるが、ボランティアの育成にしろホストファミリーの登録制度にしろ、それらを実質的に動かしていくのは簡単なことではない。担当職員の方も「自分たち自身も、ちょっと、よくノウハウが分からないっていうのもあるんですけども」と述べているように、試行錯誤の状態にあると言えよう。そして、何よりも担当職員の時間的コミットメントと熱意が必要となるのであるが、板橋区の職員の場合にはバーリントンの民間ボランティア（世界化委員会）の活動に対して尊敬と憧れの念を持ち、到達すべきモデルと

111 姉妹都市という枠組みの中で日本の青少年たちがカナダを訪れ、そこから受ける影響は自己変革的とでも呼ぶべきものである。これは残念ながら現在の日本の教育制度では与えてあげることができない体験である。「日本的な枠」を越えて、「自分とは異なる者」と面と向き合って、必死になって「目の前の問題」を解決していくことを自ら体験するという意味は非常に大きい。この件については、以下の拙稿に詳しい。「カナダとの姉妹都市関係の特徴とその影響——江東区とサレー市のケースについて——」、『人文論集』（第26・27合併号）、北海学園大学、2004年；「カナダとの姉妹都市関係の分析——世田谷区とウィニペグ市の姉妹都市関係——」、『人文論集』（第34号）、北海学園大学、2006年。

しているのである。日本の姉妹都市活動は「官主導」の傾向があるが、板橋区の場合も同様である。しかし、この活動に市民のボランティアとしての能力をいかに組み込んでいくのか、そしてバーリントンからの訪問者を「普通の生活の中に」いかに受け入れていくのかということが、「市民同士の交流」を実現していく上での重要な鍵なのである。

第六に、板橋区とバーリントン市との交流が現在まで継続されてきたのは、バーリントン側について言えば、世界化委員会の果たしてきた役割は大きい。姉妹都市関係において、カナダの場合には民間の友好協会などが中心的な役割を果たすことが多い。バーリントンの場合も、この例に当てはまるが、それに加えて国際連合の趣旨に賛同して世界平和のために姉妹都市交流を進めていくという明確な理念を掲げた組織なのである。従って、まさに「姉妹都市」という言葉から頭に描く「姉妹都市として受け入れるという環境」を提供しようとしてくれるのである。姉妹都市としては当たり前のことかも知れないが、「お客としてではなく家族の一員として」、そして「ビジネスではなく相互理解」のためにということである。一昔前とは異なり、夏の一時期に何百人もの学生が英語研修に集まるという状況の下では、「姉妹都市としての環境」を提供することはもはや容易なことではなくなっているのである。かなりの富裕層が住むバーリントンのような都市と言えども同様であるが、従来と変わらぬ「良質なホームステイ」を提供し続けられるのは、まさに上に述べたような「明確な理念」を持った団体が存在するからだと言える。

第七には、相互交流の結果、市民レベルにおける影響が明確に観察されるということである。板橋区の住民たちは「カナダという異文化」に出会い、担当職員の言葉を借りれば「自己変革」ともいえるべき体験をしているのである。特に女性であれば、「あんなカワイイ格好をしてイイんだ」という言葉が象徴的に現しているように、「自分がどのように生活するのか」という領域にまで影響を及ぼしているのである。また、男性の場合には、バーリントンでの体験が、出発前には夢にも思わなかった「日本ということ、日本人であること」を考えさせられて帰国するのである。バーリントンの

市民の場合には、板橋区の住民を受け入れることにより、家の中には屏風や人形といった日本の文化が存在するようになるのである。さらには、度々受け入れを繰り返すことにより、一般的にカナダ人にはポピュラーではない梅干しとか漬物とかも好む人たちが増えてきている。味覚というのは「好きか嫌いか」という「理屈抜き」の側面があり、その意味で日本文化の中でも味覚という領域までがカナダの家庭に存在するようになった意味は大きい。まさに、理屈抜きのレベルで、日本に対する好意的な感情と態度が存在するというを示しているのである。

第八として、相互交流の結果は、板橋区とバーリントン相互の交流を担当する部署にも影響をもたらしているということである。板橋区の担当者が目をみはるのは、日本とカナダにおける行政と住民との関係の違い、行政の役割の違いである。そして、カナダの場合に行政の役割が大きいのは、自立した市民の存在であり、その市民がボランティアを組織し、社会を動かしていると観察している。とりわけ、バーリントン市側の担当部局である世界化委員会は、ボランティアとして活発な活動をしており、板橋区の担当者はこの委員会とのやり取りを通して、このような「カナダ的やり方」を認識し、尊敬の念をもって見習おうとしているのである。もし、バーリントンの世界化委員会と出会うことがなかったら、このような変化は起こることはなかっただろう。

また、バーリントン側の担当者である世界化委員会も、板橋区の「日本的なやり方」から影響を受けている。姉妹都市関係において、ともすれば「官主導」と言われるように、行政が資金と人材の点で関与するということは、日本では一般的なことである。ところが、カナダでは民間主導が普通であるので、「日本的なやり方」は予想したことのない一種の発見である。そして、そのようなやり方を取り入れようとしているのである。それは、行政からの財政的・人的援助を要請するという措置になって現れている。また、「姉妹都市の日」を設け、板橋区の「区民祭り」を手本にして花火を打ち上げようなどというアイデアもでてきているのである。まさに、ここには異文化接触により、お互いがお互いから学び、自らが変化していこ

うという過程を見ることができるのである。

最後に、相互に影響しあい、相互に変化していく過程で、姉妹都市活動にとって極めて重要な資質が生まれてくることを指摘しておこう。その資質とは、「異文化インターフェイス」とも言うべきものである。つまり、自分の文化の仕組みと同時に相手の文化の仕組みを理解し、それぞれの文化が出会う時に、そこから生まれてくる様々な「食い違い」を「適切に処理」できる能力と言ったらよいだろう。この能力を、板橋区の担当職員の方々は既に身につけていると言ってよいだろう。既に触れたが、2時間遅れの国際スポーツ大会開会式の時の模様を思い出してみよう。2時間遅れの開会式は、「分刻みの日本的行動様式」しか知らない板橋区からの参加者には理解不可能なことなのである。一方、板橋区の担当職員は、国際スポーツ大会は全てボランティアの自主的運営によるものであり、「カナダ的アバウトな行動様式」についても理解しているのである。このような状況の下で、板橋区からの参加者の怒りも「もっとも」であり、怒りの矛先が板橋区職員に向かってくるのを「仕事として」受け取ろうとするのである。このようなインターフェイスがあるからこそ、2時間遅れの開会式という異文化ショックに出会った板橋区の人たちも、「バーリントンは良かった」という思い出を抱いて帰ってくるのであり、帰ることができるのである。

以上のように、板橋区とバーリントン市の姉妹都市活動は、様々な点で相互に影響を与えているのが分かる。そこには、カナダという異文化に出会い、日本という異文化に出会い、お互いに相手の存在を認め、お互いに影響を与えあい、そして「相手のやり方」を取り入れようとする熱意と態度がはっきりと存在しているのが分かる。まさに、文化を越えて異なる二つの姉妹都市が積極的に活動してもたらされる結果そのものであると言える。

聞き取り調査資料

- ・聞き取り調査：2002年11月10日、板橋区役所政策経営部国際交流課におい

て行われた杉山光治（企画部国際交流課国際交流主査）、有馬綾乃（企画部国際交流課主任主事）、田中美希（企画部国際交流課主事）との聴き取り調査。

資 料

- ・板橋区教育委員会事務局社会教育課『平成7年度バーリントン市青少年国際交流事業——青少年バーリントン市派遣報告』板橋区教育委員会，1996年。
- ・板橋区教育委員会事務局生涯学習課『平成9年度バーリントン市青少年国際交流事業——青少年バーリントン市派遣報告』板橋区教育委員会，1997年。
- ・板橋区教育委員会事務局生涯学習課『平成11年度バーリントン市青少年国際交流事業——青少年バーリントン市派遣報告』板橋区教育委員会，1999年。
- ・企画部国際交流課『板橋区国際化の現況』板橋区政策経営部国際交流課，2002年。
- ・財団法人板橋区文化・国際交流財団交流課『平成14年度事業概要』財団法人板橋区文化・国際交流財団，2002年。
- ・政策経営部国際交流課『板橋区国際化の現況』板橋区政策経営部国際交流課，2003年。
- ・政策経営部国際交流課『板橋区国際化の現況』板橋区政策経営部国際交流課，2006年。
- ・Burlington Mundialization Committee “Opening the Door to the World,” City of Burlington.
“Report CL-2/03” CORPORATE SERVICES DIVISION, Clerks Department.
<http://www.city.burlington.on.ca/clerks/cal/2003jan/cl-2-03.pdf>.

参考文献

- ・市岡政夫『自治体外交』日本経済評論社，2000年。
- ・伊藤善市他編『自治体の国際化政策と地域活性化』学陽書房，1988年。
- ・井上真蔵「異文化接触とコミュニケーション」、『北海道から』（特集：国際交流の光と影）北海学園大学，1985年。
- ・井上真蔵「カナダとの姉妹都市関係——何を学ぶか——」、『めいぶる』北海道カナダ協会会報第71号・創立25周年記念号，北海道カナダ協会，2004年。
- ・井上真蔵「カナダとの姉妹都市関係の特徴とその影響——牛久市とホワイト

- ホース市のケースについて——,『人文論集』(第 31 号),北海学園大学,2005 年。
- ・井上真蔵「カナダとの姉妹都市関係の特徴とその影響——江東区とサレー市のケースについて——」,『人文論集』(第 26・27 合併号),北海学園大学,2004 年。
 - ・井上真蔵「カナダとの姉妹都市関係の分析——世田谷区とウィニペグ市の姉妹都市関係——」,『人文論集』(第 34 号),北海学園大学,2006 年。
 - ・井上真蔵「国際化の一側面——北海道とカナダとの姉妹都市関係について——」,『北見大学論集』北海学園北見大学,1993 年。
 - ・島袋邦・比嘉良充編『地域からの国際交流』研文出版,1986 年。
 - ・北海道カナダ協会『第 15 回北海道・カナダ姉妹都市会議録』,2006 年。

インターネットのサイト

- ・カナダ大使館ホームページ。
 - ・「カナダ・日本 姉妹・友好都市リスト」
http://www.canadanet.or.jp/p_c/sistercity.shtml
- ・自治体国際化協会のホームページ。
 - ・「姉妹提携一覧」
<http://www.clair.or.jp/cgi-bin/simai/j/00.cgi>
- ・財団法人板橋区文化・国際交流財団交流課のホームページ。
 - ・「ICIEF 事業概要」について：
<http://www.city.itabashi.tokyo.jp/icief/zaidan/>
 - ・「板橋区・バーリントン市姉妹都市提携 10 周年記念バーリントン市長他市民訪問団の来訪」について：
http://www.city.itabashi.tokyo.jp/icief/twin/burlington/y10aniv_%82%8Aita.htm#clock
 - ・「板橋区・バーリントン市姉妹都市提携 10 周年記念バーリントン市訪問及び記念行事写真集」：
<http://www.city.itabashi.tokyo.jp/icief/twin/burlington/y10aniv.html>
- ・財団法人板橋区文化・国際交流財団のホームページ。
 - ・平成 18 年の支出額について：
<http://www.city.itabashi.tokyo.jp/bkaikan/zaidan/sub09-gaiyou18.html>

- 平成 17 年度の支出額について：
<http://www.city.itabashi.tokyo.jp/bkaikan/zaidan/sub09-gaiyou17.htm>
- バーリントン市のホームページ。
 - 平均所得について：“Federal Census 2001”
<http://cms.burlington.ca/PageFactory.aspx?PageID=500>
 - 世界化委員会について：“Burlington Mundialization Committee”
<http://cms.burlington.ca/Page100.aspx>
 - 日本訪問ツアーについて：“Friendship Tour headed to Japan”
<http://cms.burlington.ca/Page859.aspx>
 - バーリントン市について：
<http://cms.burlington.ca/PageFactory.aspx?PageID=500>